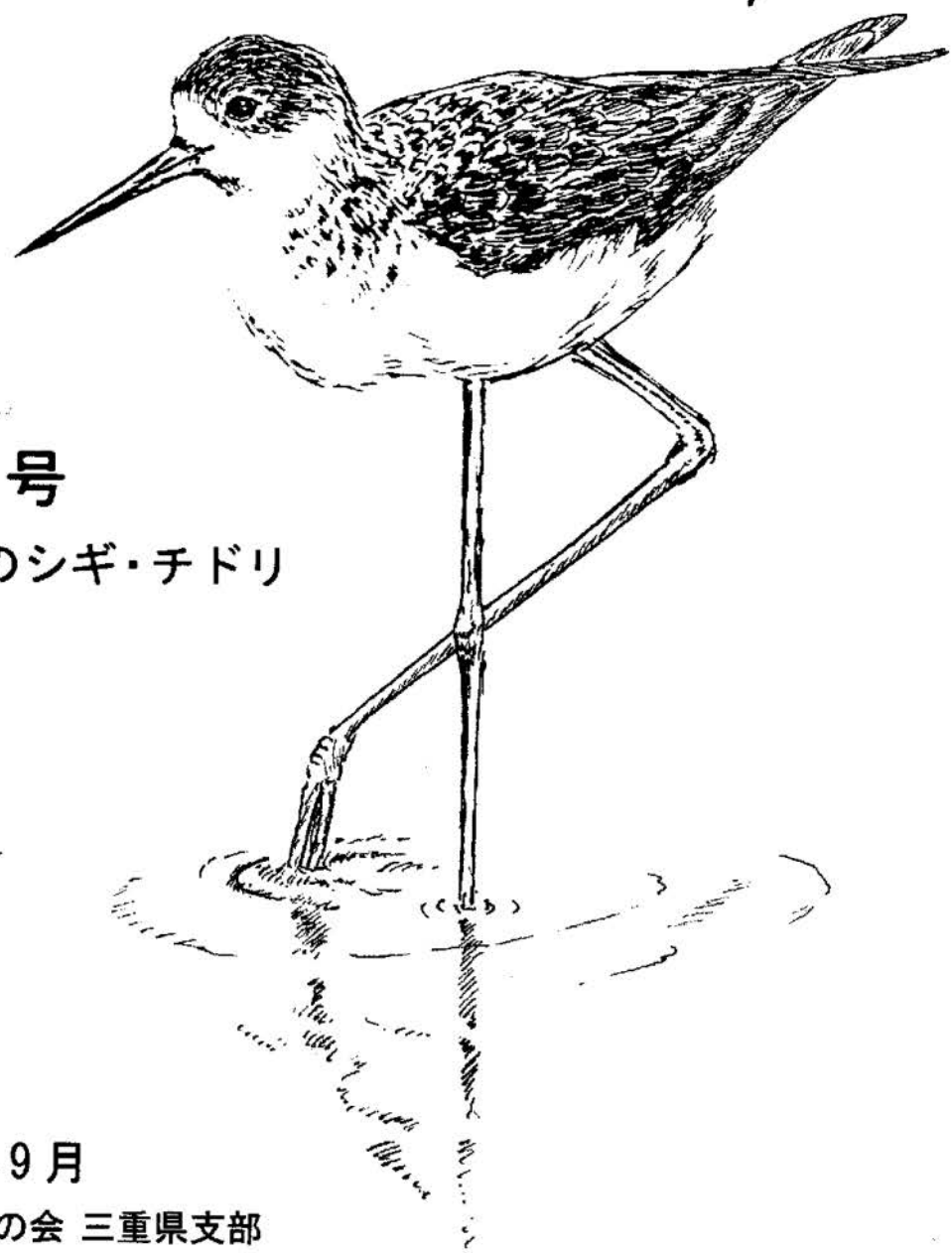
しまどり



第48号

特集：三重のシギ・チドリ

2005年9月

日本野鳥の会 三重県支部
http://www.amigo2.ne.jp/~miebirds/

H. Shimada

小さな声から

近藤義孝（桑名市・保護部長）

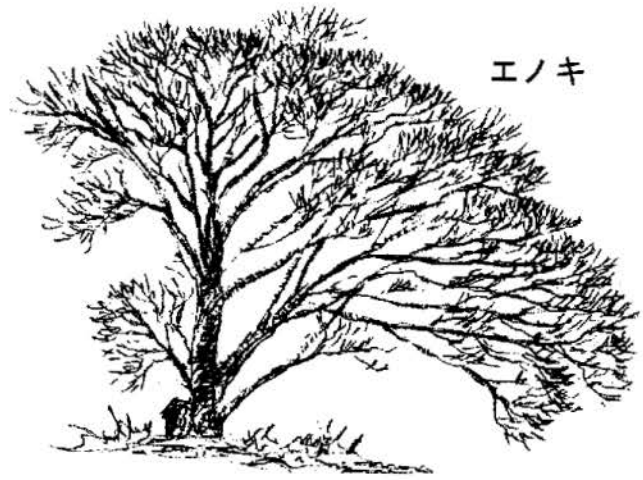
「自然の叡智から学ぼう」というテーマで「愛・地球博」が開かれています。「もったいない」という言葉が世界から注目され、小泉首相も取り上げています。首相は所信表明演説で「長生きを喜べる社会」をつくることが課題であるといっています。そして、スローライフ・スローフードなどと言われています。しかし、自分の周りを見てみると、「自然の叡智」とはほど遠く、里山をつぶしての宅地開発、ダム建設や埋め立ても続いています。会社勤めの人たちは超過勤務・過重労働が普通です。地位のある人たちの利権体質が温存され、民と癒着した公の体質も「日本道路公団」の副総裁逮捕の例でもわかります。

それでも、これまで何となく感じていた不明朗なことが少しずつ明らかにされています。2005年6月17日に放送されたNHKラジオでの中村方子中央大学教授へのインタービュー番組を聴きました。中村氏はミミズの研究者でした。大学の助手をしていた時、農薬メーカーの依頼を受けた上司の教授の「枯れ葉剤による環境への悪影響はない」とデータへの協力を拒絶したために、15年間、研究の現場から干されてしまいました。もちろんこの枯れ葉剤はベトナム戦争で使われたものと同じです。こんなエピソードを交え、ミミズの研究について話されていました。詳しくは彼女の著書を読んでみて下さい。

最近まで、私の地区で松くい虫防除を目的とした空中散布が行われていました。当時の町長に直接、やめてくれと申し入れたのですが、続

目　　次

巻頭エッセイ……2
特集：三重県のシギ・チドリ
　特集にあたって……4
　五主海岸のシギ・チドリ……4
　熊野市および東牟婁郡のシギチドリ……7
　豊津浦・町屋浦のミユビシギ……8
　南のシギチーその楽しみー……11
　鈴鹿川派川河口……12
　安濃川、志登茂川河口のシギチドリ……13
連載：野鳥と貨幣……15
今日も鳥日和……19
会員のページ
　朝明川源流を訪ねて……20
　庭に現れたノゴマ……21
　ツバメの巣引越し作戦……22
　ギンザンマシコ……23
支部活動のページ……24
野鳥情報……29
探鳥会報告……29
編集後記……32



エノキ

表紙の言葉

セイタカシギ

嶋田春幸

落ち着いた色合いのシギが多い中で、とりわけ姿が変わっているというか、目立った存在のシギ。いつも見つけた瞬間に心の中で「おおっ！」と歓声が上がります。　静かに佇む姿が美しいです。

巻頭エッセイ

けて実施されました。その元町長の前職は農協組合長でした。全国に根を張った農薬販売網の営業活動などと比べれば住民の小さな声は聞こえなかったのでしょう。昭和５２年に、「松くい虫防除特別措置法」は国会を全会一致で成立しました。この法案ができるまでには農薬メーカーが当時の農林省や森林の研究者、国会議員たちに働きかけて成立させたと聞いています。私の知人に、農薬メーカーから依頼を受け、空中散布の後の昆虫を採取し、データを集めていたものがいます。「マツノマダラカミキリも死んでいるが、一緒にいるほとんどすべての昆虫やクモなどが死んでいる」と言っていました。彼の協力した会社のパンフレットには農薬散布した森では青々した緑が残り、散布しなかった森は松が枯れ、赤くなった様子を写した空中写真が載っていました。そんな当時の「松を守れ」一辺倒の中で、その法案に反対した心ある研究者達は中村方子氏と同じような目にあったそうです。

現在、三重県支部は木曽岬干拓地でのチュウヒの保護活動などに取り組んでいます。木曽岬干拓地環境整備事業の準備書に対して、意見書を送付し、それに対して、三重県からは見解書が出される予定です。見解書は工事を推進する立場の人たちが作っているわけですから、意見書に対してどれだけ答えてくれるか疑問です。国内での繁殖が５０つがい程度といわれるチュウヒの繁殖を守るために、これからも見解書に意見を述べ、場合によっては聴聞会開催を要求し、他の団体とも協力しながら取り組んでいきたいと思っています。

木曽岬干拓地のチュウヒを保護することも干拓地整備事業を進めることも三重県の仕事であるにもかかわらず、事業推進する総合企画局だけがトップダウンで邁進しているように思います。どのような意見を述べようとも方針の根幹部分では変わらないことに、むなしさを覚えます。しかし、以前支部で行った研修会で渥美自然の会代表の大羽康利氏が「すべてがうまくいくとは限らない。自分が取り組んだことで、少しでも変わったことがあったらそれはそれで良かったと思いたい。」と語っていました。そう考えると、木曽岬干拓地の三重県担当者も土曜日に調査のために門を開けたり、できる限り誠実に話を聞こうとしてくれています。また、愛知県支部や名古屋鳥類調査会の人たちとも共同で調査をすることで、親しくしていただき、個人的には多くの活力をいただきました。

現在、環境保護活動は、社会的認知が高まっています。中村方子氏たちの時代と比べると大きな変化です。しかし、実際には環境保護活動に参加しようとする人は増えていないようです。豊かな生活の中で、個人主義や見て見ぬふりが氾濫しています。

木曽岬で一緒に活動していた尾張野鳥の会会長の浅沼秀夫氏から「どこどこの鳥を守ってほしいと言われたら、そこは自分で守りなさいと言っている」と聞きました。そのときは、浅沼氏に頼りたいという人の気持ちがわかったので、「どうして？」と疑問に感じました。今になってみるともっともなことであることがわかりました。保護活動は決して難しいことではありません。自分が大事にしたいものをどうしたら守れるか、そのことを考え、ほんの少し勇気をふるって実行することなのです。大羽氏の言うように結果がうまくいくとは限りません。でも、黙っていては何も始まりません。できることから始めてみましょう。

ノカンゾウ

三重県のシギ･チドリ特集にあたって

編集部

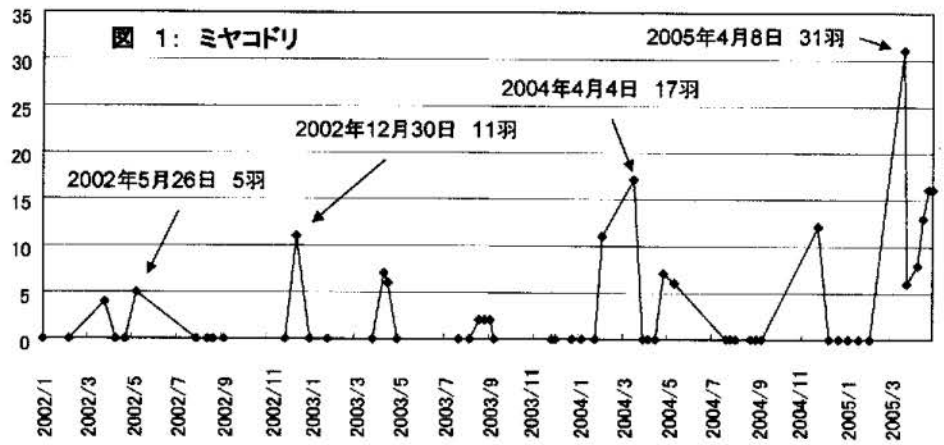
三重県は伊勢湾、熊野灘に面した長い海岸線をもつ県です。かつては伊勢湾北部には広大な干潟が広がり、それに続いて幾つかの河川の河口を含む自然海岸が伸びていました。また熊野灘沿岸は磯が連続し、それと小規模な砂浜が入り混じり、最南端には七里御浜が続き、その内陸側には志原川河口の湿地がありました。その頃シギ・チドリの飛来する場所が多くあり、シギ・チドリの大群が見られたことと考えられます。しかし、現在では県内でシギ・チドリの多く飛来する場所は五主海岸を中心とする雲出川、櫛田川河口、その他数ヶ所に限られてしまいました。今回の特集では五主海岸の最近のシギ・チドリ調査結果、豊津浦・町屋浦のミユビシギ、安濃川・志登茂川河口のシギ・チドリの状況を中心にいくつかの記事を掲載します。さらにこれまであまり、紹介されなかった熊野市、御浜町のシギ・チドリについても書いていただきました。

五主海岸のシギ･チドリ

――この４年間の記録――

調査　久住勝司（松阪市）
まとめ　平井正志（安芸郡 安濃町）

五主海岸のシギ・チドリについては先に「しろちどり」第40号で2001年と2002年に支部独自で行ったライン調査の結果を報告している。今回はWWFの依頼をうけて行っているシギ・チドリ類個体数変動モニタリング調査の結果について考察する。



調査方法

春、秋の渡り期と、冬場の２カ月に各２～３回、干潮時ピークの前後２時間以内の五主海岸の定点観察（１時間）ラインセンサスに依る三雲町海岸（堤防の両側）一周と、海岸線より200m以内の水田、水路、池等の後背地を一定のルートを決め約１時間で観察した。

結果および考察

ミヤコドリの増加、図１に示すようにミヤコドリの出現時期にはっきりとした傾向は見られないが、概して春先に多く見られる。個体数はこの４年間ゆっくりと増加傾向を示している。2005年には36羽を記録している。ハマシギは毎年700から800羽の大群がほぼ毎年春先に見られているが、すぐに通過するものらしく、次の観察日には見られなくなっている。2003年にはこの大群は見られなかったが、春先の観察が欠けているので、観察日以外の日に通過したものかもしれない。越冬群は200羽から300羽であろうと思われるが、常時観察されるわけではないので、五主海岸のみでなく、近隣の海岸、干潟を行き来しながら、越冬しているものとおもわれる（図２）。シロチドリは50羽前後が越冬期に見られる。2005年２月６日には209羽が観察された。春の繁殖期にはごく少なくなるが、夏には渡りの群れと見られる小さな集団が見ら

れる。この傾向は豊津浦・町屋浦でも同様である（図3）。キアシシギは5月から9月にかけて50羽程度の群れが見られる。年によっては大群が見られる。2003年春には140羽前後が見られ、2005年春には202羽が観察された（図3）。秋から春にかけては全く観察されていない。

オバシギ、オオソリハシシギについては2003年秋に大群が見られた。しかしその後に観察された個体は少ない。オバシギについてはその後の2004年、2005年には全く観察されていない。オオソリハシシギについては2004年秋に19羽が見られたのが最近では最大である（図4）。ツルシギは春に定期的に観察されるが、個体数は減少傾向にある。2002年には40羽近くの群れがみられたが、2005年にはわずか11羽のみであった。チュウシャクシギはツルシギよりやや遅れ、春遅くから見られる。毎年40羽前後が最大数であったが、2005年春は個体数が多く、5月17日に70羽の群れが見られた（図5）。アオアシシギは個体数が多くなく、10羽から20羽程度が毎年見られる。増減の傾向は判然としない。ホウロクシギは毎年数羽が観察されている。これまでの最大は2002年4月13日の14羽である。最近では2004年9月19日と2005年5月11日に8羽が観察されている。セイタカシギはほぼ常時1-4羽が観察されている。2004年4月には4羽、成鳥2羽と幼鳥2羽が観察されており、近くで繁殖した可能性がある。

その他の希少種について、ハジロコチドリは計5回、7羽が観察されている。オオメダイチド

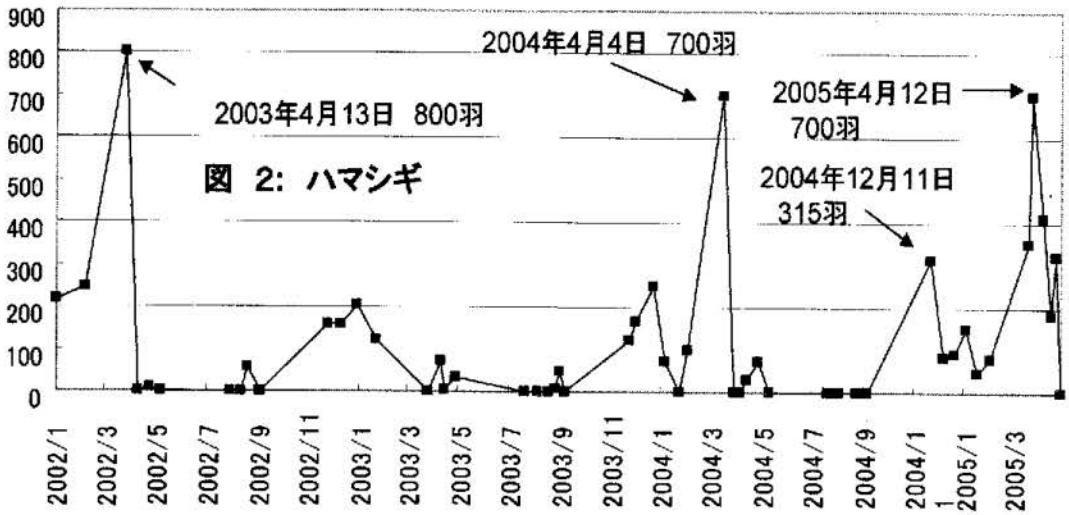


図 2: ハマシギ

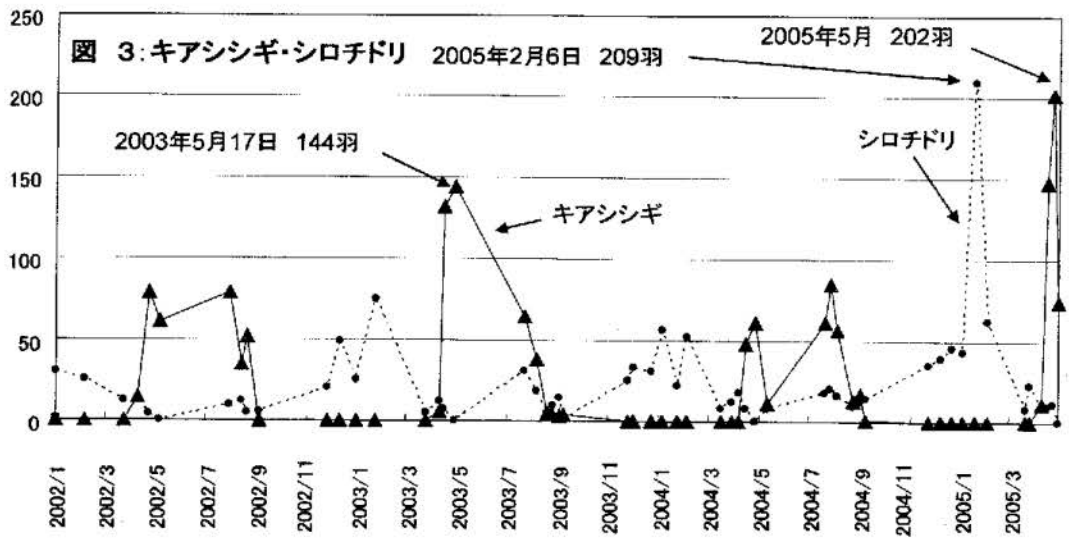


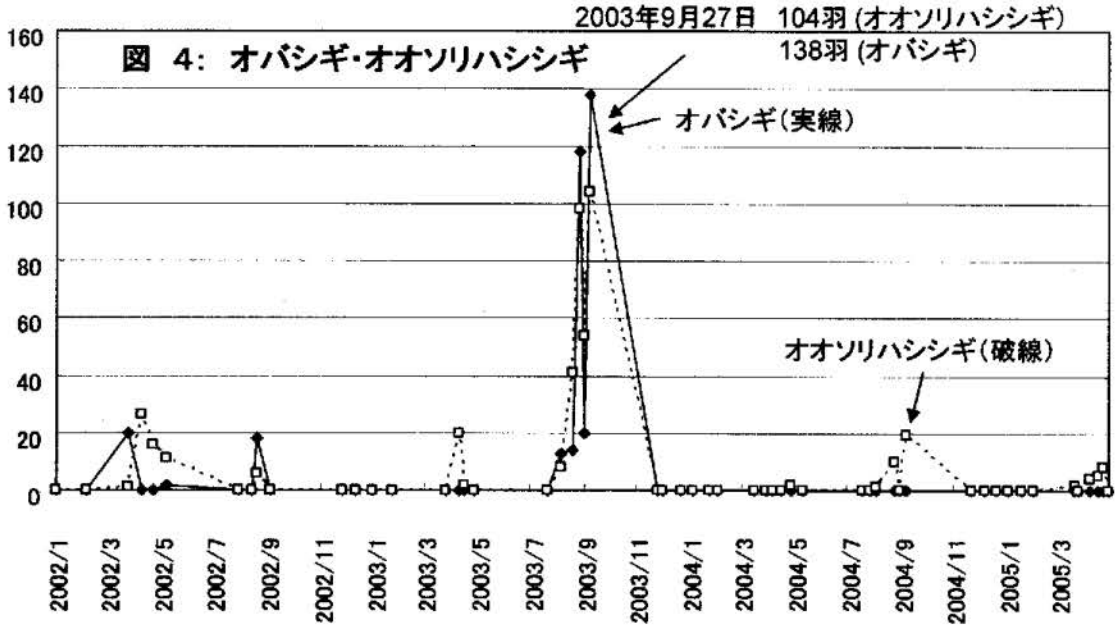
図 3:キアシシギ・シロチドリ

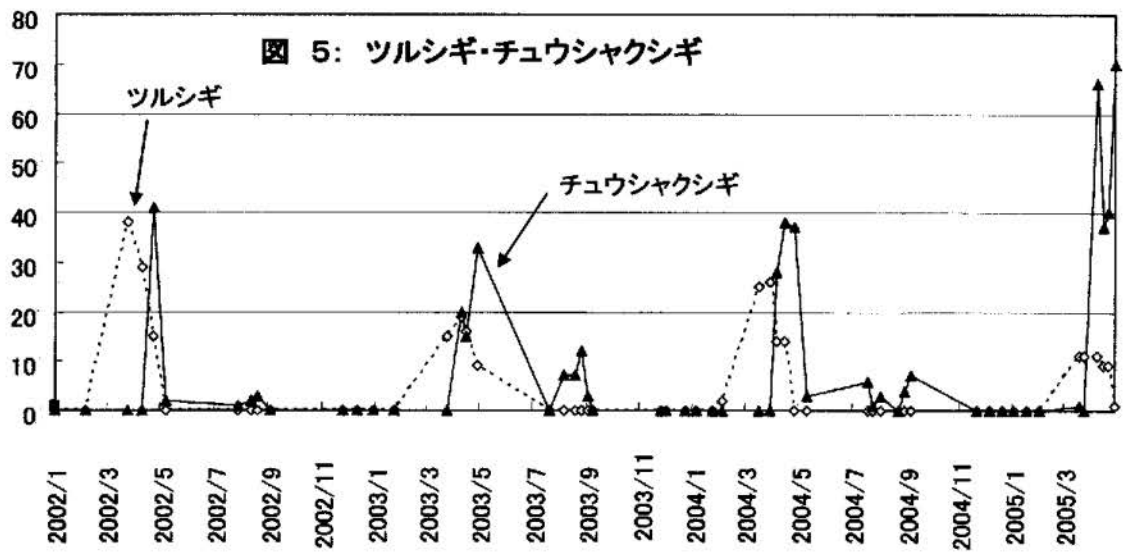
リは2003年9月27日に1羽観察されている。ヒバリシギは2004年8月22日に1羽が観察されている。オオハシシギは2003年9月7日、2004年12月26日にそれぞれ1羽見られた。カラフトアオアシシギは2002年9月8日に1羽見られた。ダイシャクシギは1-3羽が時々観察されている。アカアシシギは2002年9月と2003年に観察されている。

五主海岸では最近カイトボードが盛んになり、多い日には12基も海に出ている。高速で干潟、海を走り回るので採餌するシギ・チドリにとって、脅威となることであろう。何らかの対策が必要とされる。また最近、三重県により干潟の砂が移動された、これらがシギ・チドリの飛来にどのような影響を及ぼすのか興味ある点である。

表　チュウシャクシギ･ツルシギの各年ピーク時の個体数

	チュウシャクシギ		ツルシギ	
2002年	5月12日	41羽	4月13日	38羽
2003年	5月17日	33羽	4月29日	19羽
2004年	5月4日	38羽	4月17日	26羽
2005年	5月17日	70羽	4月12日	11羽





東アジア・オーストラリア地域シギ・チドリ類生息地ネットワーク参加基準について考察すると現在、五主海岸において生息推定数の0.25%が毎年観察されている種はない。しかし、ミヤコドリでは0.25%が25羽であるが、2005年春の観察で31羽であり、基準を超えている。今後もこの数が保たれれば、基準をクリアできる。キアシシギでは0.25%で100羽であるが、2003年5月17日に144羽、2005年5月に202羽を観察している。さらにネットワーク参加の条件のひとつでもある、上記の希少種の飛来もかなりある。今後のシギ・チドリの飛来状況によってはネットワークへの参加が期待できるであろう。

熊野市および南牟婁郡のシギチドリ

中井節二（熊野市）

私の住んでいる、東紀州の、シギチは主に、田んぼ中心です。いや田んぼしか来ないです。熊野市の有馬町、南牟婁郡の御浜町志原、市木が多く来ます。冬はイソシギ、クサシギ、タシギ、ヤマシギ、ケリ、タゲリ、コチドリ、イカルチドリが見られます。春一番に来るシギチは、3月下旬のコチドリから始まって、ムナグロ、タカブシギと続きます。

時々、珍鳥も来ます。昨年は、サルハマシギ2羽、コシャクシギ1羽、などが来ていました。昨年

科名	種名	生態	備考
タマシギ	タマシギ	留 稀	20年前くらいに繁殖していた。
チドリ	コチドリ	留 普	近頃一年中見られ繁殖している。
	イカルチドリ	留 少	熊野川で繁殖している。
	シロチドリ	留 稀	以前、七里御浜で繁殖していた。
	メダイチドリ	旅 少	毎年、各地の水田に飛来する。
	オオメダイチドリ	旅 稀	H17年、春に市木に飛来する。
	オオチドリ	旅 稀	H17年、春に市木に飛来する。
	ムナグロ	旅 多	毎年、各地の水田に飛来する。
	ケリ	冬 少	毎年、各地の水田に飛来する。
	タゲリ	冬 少	毎年、各地の水田に飛来する。
シギ	キョウジョシギ	旅 少	毎年、各地の水田に飛来する。
	トウネン	旅 少	毎年、各地の水田に飛来する。
	ヒバリシギ	旅 稀	10年以上前から飛来していない。
	オジロトウネン	旅 稀	H17年、春に市木に飛来する。
	アメリカウズラシギ	旅 稀	20年前くらい市木に飛来していた。
	ハマシギ	旅 稀	各地の水田に飛来する。
	サルハマシギ	旅 稀	H16年に志原と有馬の水田に飛来した。
	オバシギ	旅 稀	20年位前に市木に飛来していた。
	エリマキシギ	旅 少	毎年、各地の水田に飛来する。
	キリアイ	旅 稀	20年前くらいに飛来していた。
	ツルシギ	旅 稀	20年前くらいに飛来していた。
	アカアシシギ	旅 稀	20年くらい前に志原に飛来していた。
	コアオアシシギ	旅 少	毎年、各地の水田に飛来する。
	アオアシシギ	旅（一部冬） 少	毎年、各地の水田に飛来する。
	クサシギ	旅（一部冬） 少	毎年、各地の水田に飛来する。
	タカブシギ	旅 少	毎年、各地の水田に飛来する。
	イソシギ	留 少	毎年、各地の川や池に飛来する。
	ソリハシシギ	旅 稀	20年前くらいに飛来していた。
	オグロシギ	旅 稀	20年くらい前に市木に飛来していた。
	オオソリハシシギ	旅 稀	20年前くらいに七里御浜海岸に飛来していた。
	ホオロクシギ	旅 稀	H16年、春に市木にて飛来する。
	チュウシャクシギ	旅 少	各地の水田に飛来する。
	コシャクシギ	旅 稀	H16年、春に市木にて飛来する。
	ヤマシギ	冬 少	毎年、各地の畑に飛来する。
	タシギ	冬 少	各地の水田や河口に飛来する。
	オオジシギ	旅 稀	H17年、春に市木に飛来する。
	セイタカシギ	旅 少	毎年各地の水田に飛来する。
	アカエリヒレアシシギ	旅 稀	10年前くらいに志原に飛来する。
ツバメチドリ	ツバメチドリ	旅 少	毎年、各地の水田に飛来する。

の秋には、エリマキシギ合計で15羽位来ていました。今年の春には、オオチドリ(三重県初記録)2羽、ツバメチドリが合計で10羽位、オオジシギ2羽、写真がありませんが、鳥友達が見たそうですが、オオメダイチドリも来ていたそうです。三重県の中部から以北のシギチと比べても数、種類数など比べもんになりません。どうしてここら辺にシギチが、飛来するのか聞いても、私には、わかりませんが、仮説として、南から渡って来た鳥が、熊野市と尾鷲の間の山に(約1000m)に阻まれて、眼下を見ると田んぼが、広がっているので休息のために、降りるのだと思います。反対に秋には、やっと越えて山の眼下には、田んぼが広がっているために、やはり降りるのだと思います。ここで休息した鳥は、松阪あたりで、降りるのかと考えると、たぶん降りないように思います。なぜならタカブシギを例にしますと、松阪地区の人に聞くとタカブシギは、春は、非常に少ないそうです。

又今年は、ツバメチドリが、多かったのですが、その鳥も東紀州しか確認されてないようでした。この鳥たちは関東あたりで、休息するか繁殖地までに飛んでいくのかは分かりませんが、非常に興味があり、標識のついた鳥を見つけて調べてみたいと思います。

前ページの表は、この地区で観察された種類です

豊津浦・町屋浦のミユビシギ

平井正志(安芸郡・安濃町)

はじめに

ミユビシギはシベリア極北部、北極点から960km以内のタイミル半島付近の北極海沿岸、グリーンランド北部の海岸などで繁殖し、冬はイギリス沿岸、アフリカ沿岸、インド洋沿岸、東南アジア、オーストラリア沿岸、南北アメリカ沿岸で越冬する。最も南で越冬するものは南アフリカ、オーストラリア南部、南米フェゴ島にまで達する。日本でも越冬するものが、少数見られる。渡りの季節ではヨーロッパでも普通に見られる。

調査方法

豊津浦・町屋浦の5ヶ所、田中川河口右岸の干潟とそれに接する海岸、河芸町中別保樋門付近の海岸、河芸漁港南の海岸、白塚海岸および弁天樋門付近の町屋浦を干潮時間に調査した。

調査結果および考察

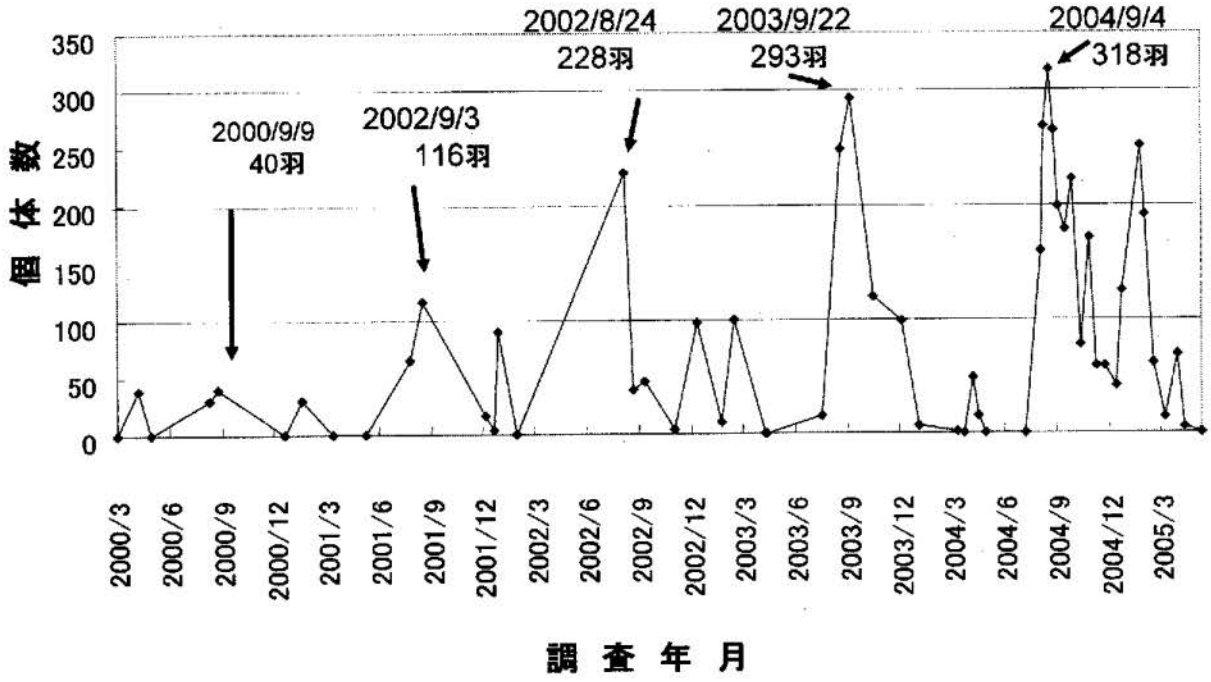
環境省の委託をうけて世界自然保護基金日本委員会(WWFジャパン)は全国のシギ・チドリ飛来の調査を行っている。それによるとミユビシギは2000年秋には約1,600羽、2001年以降は2,000羽から3,900羽を観測している(表1)。ミユビシギが多く観察される地域は千葉県九十九里浜、石川県の日本海岸、高松一河北海岸(河

町屋浦

北郡宇ノ気町、七塚町、高松町)、および小舞子海岸（石川郡美川町、湊町)、と三重県の豊津浦町屋浦であり、少数は福岡県和白干潟などでも観察されている。そのうち九十九里浜が最大の飛来地であり、全国飛来数のおよそ8割をしめる。三重県の町屋浦から豊津浦にかけては全国飛来数の約1割程度であり、重要な飛来地といえる（表1)。もっともミユビシギは他のシギ・チドリとは異なり砂浜海岸に飛来するため、現在の調査地以外の砂浜海岸に多数のミユビシギが飛来している可能性も捨てきれない。

豊津浦町屋浦では毎年秋多数のミユビシギが飛来している。主に秋の渡りで大きな群れが見られる。渡りのピークは8月後半から9月である。調査を綿密に行っている2003年以降ではピーク時に300羽近くに達している。2004年ではピーク時に318羽であった。また2004年の秋の調査では安濃川河口で204羽、愛宕川—櫛田川で85羽(いずれも最大数)が観察されている。このように見ると豊津浦町屋浦周辺はミユビシギの重要な飛来地であることがわかる。また2004年から2005年の冬には最低でも41羽が観察され、春先の2005年2月12日には250羽が観察されている。おそらく100羽ないし200羽が三重県中部の海岸で越冬したものと考えられる。一方春は観察数が詳しく観察して2004年から2005年においても極めて少ないので、春と秋とで渡りのルートが異なるのであろう（表2)。

2001年9月8日に1羽、2002年8月24日には2羽、2003年9月6日には2羽の右すねにオレンジのフラッグを付けたミユビシギが町屋浦で見られている。残念ながら、2004年の秋には発見できなかった。これらのフラッグは南オーストラリアの越冬地で付けられたもので、豊津浦町屋浦を通過するミユビシギの少なくとも一部はオーストラリアで越冬しているようである。オーストラリアではシギ・チドリに盛んにフラッグを付けている。海外での観察例はミユビシギ全体で183羽である。そのうち、大半の157羽が日本で観察されている。他のシギ・チドリでは香港や中国、韓国での観察例も多いが、ミユビシギは日本で観察される割合が特に高い。このシギは大陸沿岸を移動するのではなく、日本列島が特に重要な中継地であるといえるだろう。



図：豊津浦／町屋浦で観察されたミユビシギの個体数

今後も継続してこの海岸でこの数のミユビシギの飛来がみられるのか。また越冬も継続して見られるのかが興味ある課題である。豊津浦／町屋浦でも釣りやマリンレジャーで海岸に進入する人が多くなっている。ミユビシギに関しては繁殖地ではないので、今のところ大きな影響は出ていないが、今後何らかの対策が必要になるかもしれない。

東アジア・オーストラリア地域シギ・チドリ類重要生息地ネットワーク（East Asian-Australasian Shorebird Site Network）では生息地のネットワークへの参加基準を定めている。それによる、1）定期的に2万羽を超えるシギ・チドリ類が利用している。2）定期的に特定の種の最少推定個体数の1％を超えるシギ・チドリ類が利用している。3）絶滅のおそれのあるシギ・チドリの種がある程度利用している。の3指標があり、そのうちどれかひとつの指標を満たせばネットワークに参加できるとなっている。ミユビシギについては最少推定個体数が22,000羽とされており、1％基準で220羽、0.25％基準で55羽であり、2002年以降豊津浦／町屋浦では毎年220羽以上の個体数を観察しており、ネットワークへの参加条件を満たしているといえる。カナダ野生動物局（The Canadian Wildlife Service）はミユビシギの全世界の個体数を643,000羽、そのうち300,000羽がアメリカ大陸で、残りがユーラシア大陸で繁殖していると推定している。上記の22,000羽という最少推定個体数と全世界の個体数の間に多きな開きがあるが、これはユーラシア大陸東岸を通る最少推定個体数であろう。

参考文献

優先して保護区にすべきシギチドリ類の渡来地（財）世界自然保護基金ジャパン　2001年11月

Shorebirds P. Hayman, J. Marchant and T. Prater Christopher Helm Ltd, London

Australasian Wader Studies Group (http://www.tasweb.com.au/awsg/)

なお全国のミユビシギの調査結果は世界自然保護基金ジャパンによる各調査期の報告書から引用した。

表1は調査期間内におけるそれぞれの調査値の最大観測数にもとづく合計値である。なお2004年のWWFの集計には豊津浦／町屋浦のデータが加算されていないミスがあったため、それを加算してある。

ミユビシギ
（夏羽）

表1：ミユビシギの飛来状況
（各年秋の最大数）

年	豊津浦/町屋浦	全国	%
2000	40	1636	2.4
2001	116	2305	5.0
2002	228	3901	5.8
2003	293	2625	11.2
2004	318	2913	10.9

表2：豊津浦/町屋浦における2004年以降のミユビシギ個体数の変動

2004/1/19	6	2004/10/16	222
2004/3/28	1	2004/10/30	77
2004/4/10	0	2004/11/14	171
2004/4/25	48	2004/11/27	59
2004/5/4	15	2004/12/11	58
2004/5/16	0	2004/12/31	41
2004/7/25	0	2005/1/9	124
2004/8/21	160	2005/2/12	250
2004/8/27	268	2005/2/20	191
2004/9/4	318	2005/3/5	61
2004/9/12	264	2005/3/26	14
2004/9/19	198	2005/4/18	68
2004/10/2	178	2005/4/29	5
		2005/5/29	0

南のシギ・チーその楽しみ

世古口有司（度会郡 二見町）

最近、他の用事でよく名古屋へ行っています。夜帰ってくる時、近鉄電車からだんだん人が降りていき、松阪を過ぎるとがらがらになってしまいます。県の南の方はほんとに人が少ないなと寂しく思います。だけどその分自然がたくさん残っていて、鳥見には適しているともいえます。

ところが、ことシギ・チドリ類に関しては、北のほうが恵まれているというのが定説になっています。特に伊勢周辺では自然が残っている割にはシギ・チは少ないように思います。その理由は単なるウォッチャーの私にはよく分かりません。それでも、私は折々、特に春秋にはついついシギ・チを求めて出かけて行きます。そして、いつもの観察ポイントを一回りということになります。

まずは近くの五十鈴川河口（二見町）、ついで西へ回って宮川河口（伊勢市）、さらに伊勢湾沿いを北上して笹笛川河口（明和町）。その先は南勢ではありませんが、松阪市のいくつかの川の河口、時には、雲出川や津市まで。

でも、種類や羽数を調べるわけでもなく、特に細かな観察をするわけでもない。極端に言うとボーッと眺めているだけという、気楽な鳥見です。鳥のいる環境で鳥を感じ季節を感じることが、鳥見の一番の楽しみです。特にシギ・チの場合、比較的自然の状態が残っている海岸や河口部が中心ですから、その環境にいるというだけで楽しいと思うことができます。そんなわけで、汐もあまり考えずに出かけて、ほとんど鳥を見られないということもあります。そんな時は、砂の上に座り目を閉じて波の音を聞きながら、かつて見た鳥の姿、声を思い浮かべれば、浮世離れのいい気分を味わうことができます。

では、今までに見たこのあたりのシギ・チで、心に残る鳥を思い起こしてみることにします。

随分前のことですが、夏の終わり、もう秋を感じるような風が吹いていましたが、そんな夕方、宮川河口の小さな砂浜で佇む２羽のチュウシャクシギを見つけました。その姿が寂しげであまりにも風情があったのです。人生の行く末を考えてでもいるような。それはこちらの勝手な思い込みだけど、まあこういうことも鳥見の楽しみの一つといっていいでしょう。で、その姿を写真に収めました。写真は時々思いついて撮る程度で決して得意というわけではありませんが、なにか心に響くものがあったのです。それに「旅路－チュウシャクシギ－」という題をつけて、町の美術展に出したら賞をいただいてしまいました。自慢話でしたね。失礼しました。

伊勢市一色町の五十鈴川に向かっている水門のところに小さな泥干潟ができる場所があります。ゴミが多く決してきれいとは言えませんが、シギ類が結構入るので、通りかかるようにしています。これも随分前のことになってしまいましたが、ここで初めてセイタカシギを見ました。本当に夢のように美しい姿のシギなので、嬉しくて翌年の年賀状に下手なCGになって登場してもらいました。今でも幻かと思えるほどの出来事でした。

南勢地区ではダイシャクシギなどの大型のシギを見ることはきわめて少なく、松阪では見ましたが伊勢では私は見ていません。丁度その間の明和町が最南ではないでしょうか。明和町にその名も美しい笹笛川という小さな川がありますが、河口から見ると遠くに伊勢の山を望むその中央に結構大きい砂干潟ができ、シギ・チが

ホウロクシギ

よく見られます。そこで見たホウロクシギは大きくて立派でいつまでも眺めていたものでした。

さて、ここ何年も他事にかまけて支部の活動もほとんどしていません。でも、鳥見はマイペースで続けていますので、皆さんまたいつかよろしくお願いします。

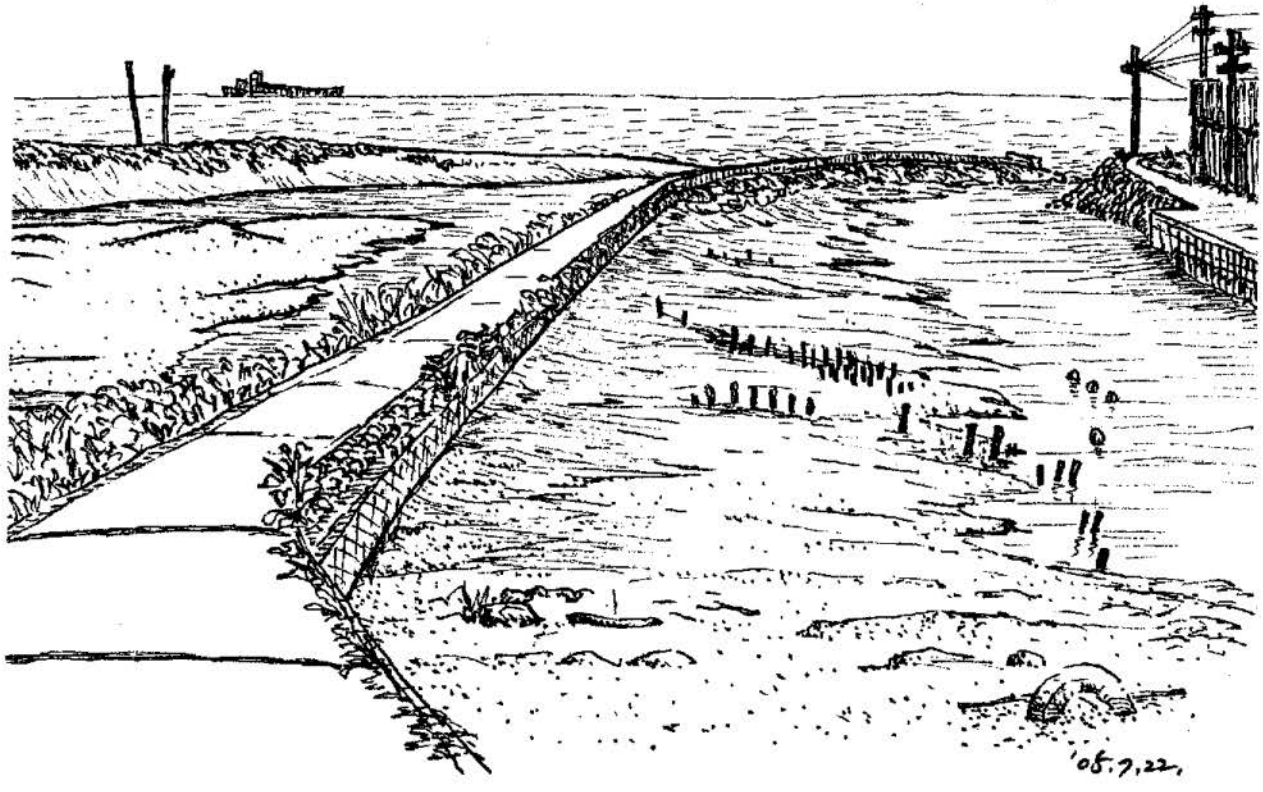
では、家の近くの五十鈴川からここ数日よく耳にするようになったキアシシギの声に誘われて、またシギ・チのロマンに浸ってこようと思います。

鈴鹿川派川河口

鹿島素子（四日市市）

ここは鈴鹿川本川河口より３ｋｍほど南にあり、その間に、楠漁港、自然海岸がわずかに残る吉崎海岸、使われていない養魚池、少し内側には田圃、と多様な場所がありますが、人間活動の盛んな、どちらかと言えば自然の乏しい所です。ここではコンクリートに固められた堤防から眺めるのですが、突堤を挟んで小さな港があり、港の中でも干潮時には、堤防の真下にキョウジシギ、メダイチドリなど、双眼鏡なしでも充分見られる距離までやってきます。本川河口は、季節により人が多く入りますが、こんな時こそ派川河口に鳥が集まり、探鳥には最高の日となります。鳥達は一方が気に入らない時や餌など充分に採れないときなど、あちらに行こ！と２～３分の飛行で行ったり来たりしています。真夏のほんの短い時期を除き、干潮時には必ず誰かと会うことが出来るこの河口を、もう20年あまり、飽くことなく眺めています。誰にも会えなければ、ぼんやりと日常を忘れて風景の中に身を置き、柄にもなく、人間とは一体何なのか！などと考えたり致します。山の中とは異なり、一人で見ていても安全な場所ですから、私にとっては宝のようなこのフィードに恵まれたことを感謝しています。

（カットも著者）

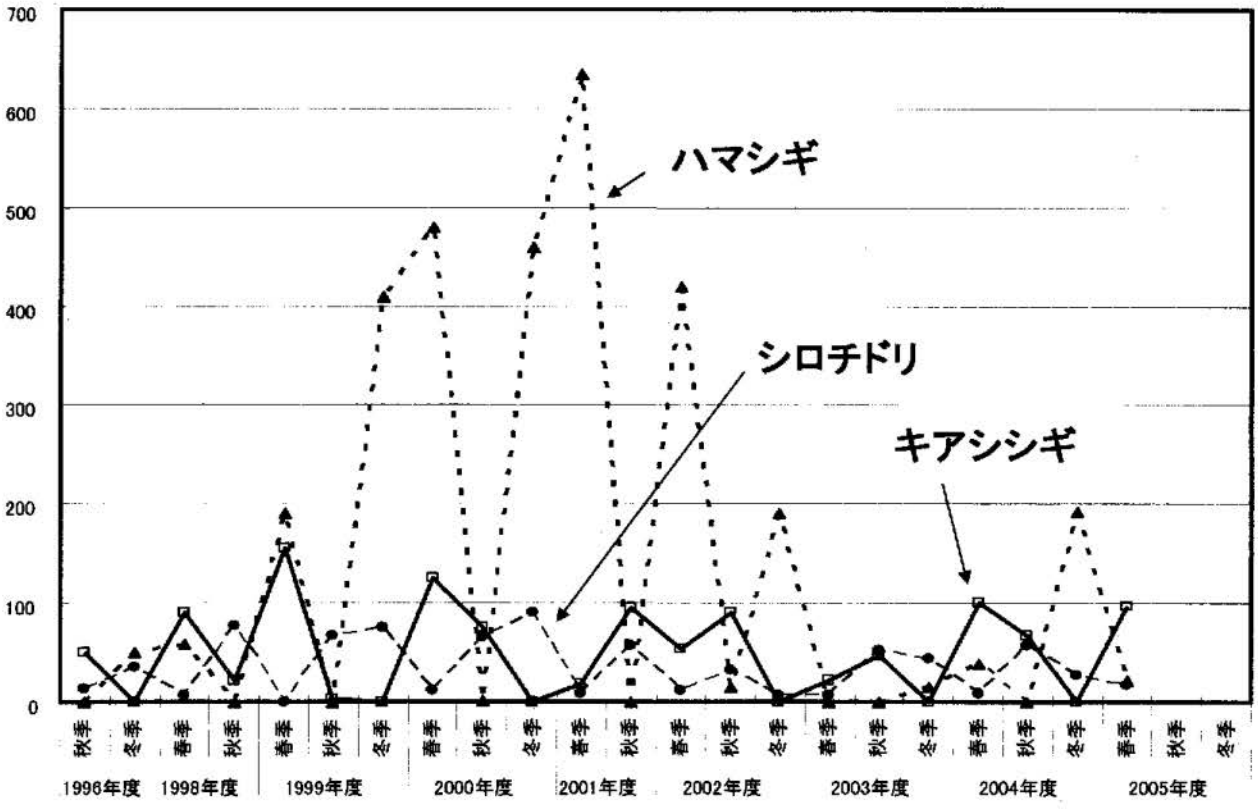


安濃川、志登茂川河口のシギ・チドリ

西浦　克征（津市）

布引山地を水源として津市街地を流下する延長24㎞の安濃川と、芸濃町椋本（むくもと）から一身田町内を流れる延長14㎞の志登茂川は、島崎町で河口を接する形で伊勢湾に注いでいる。この河口付近は低湿の荒地であったのを、寛政4年（1792）に松本宗十郎安親が、私財を投じて3年の歳月をかけて安濃川と志登茂川の河口を分流し、海岸に堤防を築いて約5.2 haの新田を開発した。その後ここは松本崎（まつほざき）と呼ばれるようになった。明治3年（1870）の大津波で破壊された後は、養魚場として利用されていた。

安濃川の河床は砂地、志登茂川は泥質で干潮時には両河口の前面に干潟が現れる。冬季は干潟や河口の水面でカモやカモメ類を、かなり近い所から観察できる絶好の箇所である。シギ・チドリは安濃川では23号線バイパスに架かる安濃津橋より河口側で、志登茂川では江戸橋（木造）上流にある西浜橋下流から河口にかけて観察できる。表の観察データは平成8年（1996）からのもので、各季節の観察日が数日ある場合はその中から種別最大数をピックアップしたものである。比較的多く観察できるものは、ハマシギ、キアシシギ、シロチドリである。キアシシギは江戸橋上流側で、ハマシギやシロチドリは安濃川河口で多くみられる。いずれも2000年前後に比べると減少気味であるが、総数が減っているのか、この地にやってくる数が減っているのかはよく分かっていない。もともと数は少ないが、ソリハシシギやオオソリハシシギも減少傾向にある。わずかではあるが増えつつあるように思われるものに、チュウシャクシギとミヤコドリがある。ミヤコドリは雲出川河口との間を行ったり来たりしているので見られないこともある。ミユビシギは渡ってきた直後には河口でも見られることがあるが、その後はほとんどが町屋浦以北で採餌しているようである。



図：安濃川・志登茂川河口におけるシギチドリの変化（各季の最大数）

特集：三重県のシギ・チドリ

安濃川河口付近でのシギ・チドリの数や種類がそれほど多くないのは、①干潟の面積が大きくない。②潮干狩りなど人の出入りが多い③後背湿地や田などが無い、などが原因であると考えられる。直接シギ・チドリには関係ないと思われるが、両河口に挟まれた養魚場の跡地に雑草が茂り、小鳥たちの絶好の住みかであったところが宅地になり、味気ない景色が広がっている。

シギ・チドリを現状より減少させないためにも、河川の汚れによる餌環境の悪化を防ぐとともに、出来るだけ静かな環境づくりに心がけていきたいものである。

ハマシギ

表：安濃川・志登茂川河口におけるシギチドリ（各季の最大数）

種別＼年月	1996年度		1998年度		1999年度			2000年度			2001年度	
	秋季	冬季	春季	秋季	春季	秋季	冬季	春季	秋季	冬季	春季	秋季
ミヤコドリ						1	7		6	14	8	
シロチドリ	13	35	6	77		67	75	12	65	90	9	56
メダイチドリ			34		5				4		10	6
ダイゼン				1								
ケリ							6	1		2	1	2
キョウジョシギ			14		2				1			
トウネン	3			41		5			2			1
ハマシギ		50	58		190		410	480	1	460	635	
ミユビシギ		50				28	25			28		
アオアシシギ												
タカブシギ				2					1			
キアシシギ	50		91	21	155	4		126	76		19	96
イソシギ				1		2				2		2
ソリハシシギ	30			13		15			15			15
オオソリハシシギ	22	1		10	1	20		10			21	2
ダイシャクシギ												
ホウロクシギ												1
チュウシャクシギ	2		34	3	14			6			16	
コシャクシギ	1											

種別＼年月	2002年度			2003年度			2004年度			2005年度
	春季	秋季	冬季	春季	秋季	冬季	春季	秋季	冬季	春季
ミヤコドリ	9		19	9	2	4	23		17	19
シロチドリ	12	32	6	6	51	43	9	56	27	16
メダイチドリ	4	5					18	14		20
ダイゼン				27			1	6	3	
ケリ	2	1	2							
キョウジョシギ	4	2			1		5		3	10
トウネン								11		
ハマシギ	420	15	190			15	39		192	21
ミユビシギ		115						204	1	
アオアシシギ				1						
タカブシギ										
キアシシギ	54	90		21	46		101	66		97
イソシギ	1				1	1		1	1	
ソリハシシギ		16		1	8		5	25		2
オオソリハシシギ	9									3
ダイシャクシギ								3		
ホウロクシギ	1				1					
チュウシャクシギ	17			37	1		65	7		24
コシャクシギ							1			

野鳥と貨幣(続編)

(お金には野鳥がいっぱい)

坂口　守（鈴鹿市）

6．世界の紙幣（お札にも鳥がいっぱい）

お金にはコインばかりでなく、お札もある。中国では宋の時代から紙幣が使われて、世界で最も古いといわれている。日本では室町時代に始まったとも云われていますが、何の資料も残っていません。その後藩札発行があり、明治維新、太政官札から大蔵省脱換証券の発行となった。その後、国立銀行条令、日本銀行の設立から種々の変遷を経て今日の紙幣（貨幣）となった。

紙幣の図柄は、肖像図柄などの国の政治的、経済的、歴史的背景を反映したものが多い、時には、極めて強い政治的な宣伝に利用されたものもある。各国の紙幣の図柄を眺めてみると、その国の諸情勢を理解することができる。

その中で、今回野鳥に係わった物を拾ってみた。(表―1　世界の名鳥貨幣)。

日本のお札に描かれている丹頂や雉が登場するが、世界各国のお札には様々な動物がデザインされている。民族文化や宗教などに取り込まれ、その象徴として聖獣として紋章などに図案化された形で描かれたものが多い。2，3拾ってみると。

ライオン：　世界各国最も多い、中国では獅子文化という。

竜：　中国では古くから竜が皇帝のシンボル、日本でも初めの頃使われた。

馬：　ユーラシア大陸の遊牧民。

鷲：　鷲はその飛翔の速さ、鋭さ、強さから古くから百鳥の王とされてきた。主として西アジア、欧州、その起源は古代、バビロニアの時代から皇帝のシンボルであった。

白頭鷲：　アメリカでは独立後、国鳥に選定された。北米大陸に棲む唯一の鷲である。

鳳　凰：　日本でよく使われているものに鳳凰がある。図鑑には無く広辞苑を引くと、「古来中国では麒麟、亀、竜と共に四瑞として尊ばれた想像上の瑞鳥（目出度い鳥)、形は前は麒麟、後は鹿、頭は蛇、尾は魚、背は亀、顎は燕、嘴は鶏に似て五色絢爛声は五音にあり、梧桐に宿り、竹実を喰い、霊泉を飲むといい聖徳太子の兆しとして現れると伝え、雄を鳳、雌を凰という。」とありました。(表―1　世界の名鳥貨幣)

7．　日本のコイン

わが国の最初の貨幣は、長らく和銅開珎であると知らされてきたが、1999年奈良明日香村の飛鳥池遺跡から「富本銭」と呼ばれる銅線が出土、大騒ぎとなり定説を覆し、教科書も書き換えられた。和銅開珎が708年、富本銭が683年である。(注)　富本銭の意味は中国の後漢初期、馬援という人が皇帝に貨幣鋳造を進言したとき「富民之本、在於食貨」(民を富ませる基本は食と貨幣にある）といったと言うことである。

わが国も長い変遷を経て、明治15年、日本銀行が設立され従来流通していた貨幣が統一され、本格的なコインが作られるようになった。大阪天満の淀川沿いに造幣局が設立され、貨幣の形も方形から円形に、貨幣単位も四進法の両、分、朱から十進法の円、銭、厘となった。世界の貨幣には国王の肖像を摸刻するものが多いが、日本では「現人神である天皇の肖像を人民の手に触れることは畏れ多い」と不許可となった。そのため、太陽、菊、桐、竜などの図柄が用いられた。古来竜は、天子を象徴することからこのような構想が生まれた。それが日清戦争後、竜を尊ぶのは中国思想であって、わが国では不適当であると言うことになり、旭日やその他のデザインに変ったのであった。大正時代には翼をひろげた鳳凰を左右に配し、裏面には日章の真中に八咫烏が描かれた。(50銭銀貨）昭和のニッケル貨の5銭の表は金鵄が羽を広げ、裏は勾玉連環であった。また、1銭銅貨にも八咫烏、戦時中のアルミ貨にも八咫烏が描かれた。終戦後5円黄銅貨の表は国会議事堂、裏には鳩と梅花となり菊紋が消えた。1957年100円銀貨に単体の鳳凰が大きく羽を広げた優雅な姿で描かれた。

8．　日本記念コイン

1964年の東京オリンピックには、是非記念貨幣をとの声があり千円、100円銀貨が出た。その

後、国の行事ごとに記念貨幣が発行された。その中で鳥の図案があるものをみると。

1986年　天皇陛下御在位60年記念
　10万円金貨に鳩・水
　1万円に日の出・瑞鳥・かもめ
1987年　青函トンネル開通記念
　500円白銅貨、トンネル・波・鴎
1991年　天皇陛下御即位記念
　10万円金貨、鳳凰・瑞雲
1992年　皇太子殿下御成婚記念
　5万円金貨、瑞鳥の鶴2羽波
　5000円銀貨　同上
　500円銅貨　同上
1999年　天皇陛下御在位10年記念
　1万円金貨、鳳凰・桐・白樺
2003年　日本国際博覧会記念
　1万円金貨、地球・コノハズク

以上、鳥の図案があったものをみると、9種類、鳳凰、瑞鳥、鳩、鶴、鴎、コノハズクがある。印象に残るのは昭和63年青函トンネル開通記念の500円白銅貨でトンネルの周囲に鴎が舞い、遠く波が打つ姿であった。

鳥仲間にとって素晴らしいことは、愛・地球博の記念金貨に、地球を取り巻く自然の中に愛知県の県鳥である「コノハズク」を配されたことである。「自然が有している素晴らしい仕組み、生命力を表現しており、コノハズク親子は『人間と地球の共生』『人類の平和的な結びつきを自然への慈しみの心』を象徴しているのである。

（カットも著者）（以下次号に掲載予定）

5銭ニッケル貨

青函トンネル開通
500円

2005年日本国際博
記念1万円

世界の名鳥貨幣一覧表

（表—1）

鳥名	紙幣発行国
アジサシ	○ベリゼ（セント）　□セーシェル（ルピー）
アビ	□カナダ（ドル）
イーグル	○アメリカ（ドル）
イヌワシ	○シンガポール
イワシャコ鳥	○ジブラルタル（ペニー）
インコ	□スリランカ（ルピー）
インドクジャク	○ビルマ
エミュー	○パプアニュウギニア（トエラ）
オウム	○インドネシア（ルピア）　□ブラジル（レアル）
オッソボ	□サントメ・プリンシペ（トーブラ）
カイチヨウ	○オルダニー（ポンド）　□フィンランド（マルカ）
カナダガン	○カナダ（エリザベス22世）　カナダ（ドル）
カナダツル	○カナダ（ドル）
カムセウラ	□サントメ・プリンシペ（トーブラ）
カモメ	○マケドニア（デニー）　□カタール（リアル）□ブルガリア（レカ）
カラス	□ニュージランド（ドル）○日本〔円〕（八咫烏）

凡例　○印はコイン
　　□印は紙幣
　　（　）は貨幣単位

連載：野鳥と貨幣

鳥　名	紙　幣　発　行　国
カワセミ	○オーストラリア　□カナダ(ドル)　□ガンビア（ダラシ）　□サントメ・プリンシペ（トー　　ブラ）
カンムリセイラン	○ネパール（ルビー）
キウイチョウ	○ニュージーランド（ドル）
九官鳥	□スリナム（ギルダー）　□ボツワナ（プラ）
キ　ジ	○中国（ユアン）□日本（円）
ギンザンマシコ	□カナダ（ドル）けっつ
クジャク	○ビルマ（ルピー）中国（香港ドル）□スリランカ（ルビー）□マケドニア（デナル）
クジャクバト	○インドネシア
ケッツアル	○ガアテマラ（ペソ）
コウノトリ	○アフガニスタン（アフガニ）　○中国（元）　□ガンビア（ダラシ）
コウモリ	○マカオ（パタカス・アヴォス）
極楽鳥	○ニューギニア（マルク）○パプアニューギニア（トエラ）○インドネシア（ルビア）□　パプアニューギニア（キナ）
コート	○トリニダードトバゴ（ドル）
コトドリ	○オーストリア（セント）　○ボツワナ（テベ）
コマドリ	○ニュージランド（ドル）　□カナダ（ドル）
コンコルド	○チリ（ペソ）
サイチヨウ	○ザンビア（　）　○マレーシア（　）
サ　ギ	○ニュージランド（ドル）
サンコウチョウ	○セーシェル
瑞鳥	□中国〔円〕　□ブータン（ニュルタム）○□日本（円）
シ　ギ	□ブラジル（レアル）
ショウジョウトキ	□トリニダートドバコ（ドル）
ジョービタキ	□ドバコ（ドル）
シラサギ	○ハンガリー（フオリント）
シマフクロウ	□カナダ（ドル）　ザンビア（フクチャー）
スズメ	○南アフリカ（セント）
セイタカシギ	○ニュージランド（ドル）
ソデグロツル	○アフガニスタン
ダイサギ	○ニュージランド（ドル）
タ　カ	□ニュージランド(ドル)
ダチョウ	○タンザニア

キブシ

連載：野鳥と貨幣

鳥　名	紙幣発行国
丹　頂	○中国（元）　□日本〔円〕
ツ　ル	○韓国（ウホン）　□中国（5円）
ツバメ	○サンマルノ（リラ）○スロバニア（トラールヤ）□エストニア（クローン） □　グルジア（ラリ）
ト　キ	○中国〔元〕　□東カリブ（ドル）□トリニダード・ドバコ（ドル）
ドードー	○モーリシャス（ルピー）
ニ　ー　ル	□スウエーデン（クローネ）
ニュージランドデイ	○ニュージランド（ドル）
ノドアカクロサギ	○ボツワナ
ハイイロペリカン	○バージン諸島（セント）
パパフィゴ	□サントメプリンシペ（トーグラ）
ハクトウワシ	○アメリカ（ドル）
ハクチョウ	□アイスランド（クローネ）□フィィンランド（マルカ）
ハチドリ	○キューバ（ペソ）□ブラジル（レアル）□トリニダード・ドバコ（ドル）
ハチクイドリ	□ガンビア（ダラシ）
ハヤブサ	□アラブ（エジプト）□オーマン（バイザ）
ハ　ト	○サンマルノ（リラ）○ボスニア・ヘルッェゴヴィナ（マルカ） ○ニュージランド　〔ドル〕 □クロアチア（クーナ）□セイシェル（ルピー）□チュニジア（ディナール）○日本
ヒ　ク　イ	○パプアニューギニア（トエラ）
フクロウ	○ギリシャ（ドラクマ）○日本（円）（コノハズク）
フオベット	□キプロス（ポンド）
不死鳥	○イタリヤ（リラ）
ブルーダック	□ニュージランド（ドル）
ペニツル	○バハマ（ドル）
ペリカン	○アルバニア（レク）○バージン諸島　□マラウイ（クワチヤ）□東カリブ（ドル）
ペンギン	□エクアドル（スクレ）　□ニュージランド（ドル）
鳳　凰	□中国（10円）□香港（ドル）ブータン（ニュルタム）日本（円）
ミ　サ　ゴ	□カナダ〔ドル〕□ザンビア（フワチヤー）
ムクドリ	○インドネシア（ルピア）
モ　ウ　ア	□ニュージランド（ドル）
ヤツガシラ	○ポーランド（ズウォティ）　□ガンビア（ダラシ）
ヨ　ウ　ム	○ベリゼ（ドル）
ライチョウ	○フィンランド（マルッカ）
ヤ　マ　シ　ギ	○アイルランド（ペンス）
ルーン鳥	○カナダ（ドル）
ワ　シ	○オーストラリア　○□メキシコ（レアル）○チリ（ペロ）○フィリピン（ペソ） ○　シリア（ポンド）○ドイツ（マルク）○アイルランド（ディナー）○ポーランド ○　メキシコ（ペソ）○ボツワナ（テベ）○ロシア（ルーブル） ○ハンガリー（フオリント）○南アフリカ（セント）□チェコ（コルナ）□アメリカ（ドル）□ギリシャ（ドラグマ）
双頭のワシ	○ローマ帝国　○ハンガリー　○オーストリア　○ドイツ（リューベック） ○ロシア（ピョートル大帝）
白頭　ワシ	○アメリカ（ドル）
ワライカワセミ	○オーストリア（ドル）

ふぁるこおばちゃんの 今日も鳥日和 その8

ご近所ヤマセミ観察記　5月31（火）～8月6日（土）

町内のAさんより、会あてに、近くの資材置き場の土山でヤマセミ、カワセミが営巣中との通報あり。土山が壊されるかもしれないので、何とかしてほしいとのこと。さっそく事務局より土地所有者のO社に連絡し、巣立ちまで現地に手をつけないように依頼、近所のよしみで観察を開始しました。家族が起きる前の1～2時間を主な観察時間としたため、早寝早起きの2ヶ月あまり。ヤマセミのほうはハプニングもあり、かろうじて1羽だけ巣立ったもよう。通報してくださったAさん、作業中断を快く受け入れてくださったO社の社長さん、どうもありがとうございました。

ついに目撃！餌運び

7月6日午前6時半すぎ、初めて巣穴に餌をくわえて入るのを目撃。10分以上、止まり木で様子をうかがってから一気に飛び込んだ。やはりヒナが餌っていた！
巣穴から3分くらい出てこなかったのは、ヒナがまだ、小さいのだろう。

カラスの襲撃

7月24日午前7時すぎ、親が餌をくわえてもどると、巣穴や止まり木付近に、4羽のハシボソガラスがうろうろ。すきを見て穴に飛び込んだ瞬間、後ろから1羽が尾羽をひっぱった！えさをねらってのことか。カラスはそのあともしつこく、巣穴をのぞきこんだりしていた。

台風接近！

7月25日午前5時50分頃より。台風が接近、まだ降っていないがかなりの雨が予想された。観察開始直後から断続的に、巣穴の入り口で魚をみせびらかしては飛び去る行動を、何十回も繰り返す。中からは餌をねだるヒナの声が…。少し早いようだが、巣立ちを促しているもよう。付近にはカラスもいるのに、大丈夫？6時53分、結末を見届けることができないままひきあげる。残念。

ああ巣穴崩壊！

台風はそれたがまる1日風雨が強かった。7月26日午後6時頃、天候も回復しやっと様子を見にいく。
ところが、なんたること！巣穴の入り口がとけたようにふさがれ、親が1羽、所在なげに止まり木に止まっていた。昨日の誘い出し作戦は成功したのか、失敗したのか？ヒナは生き埋めになったのだろうか。無事に巣立っていたらいいがと2、3日近くを注意して見るが、巣立ちビナの姿は見つけられない。

巣立ち確認、よかったね！

8月4日、近くの池で親子発見。やはり、1羽しか巣立たなかったようだ。残りは間に合わなかったのか、カラスにやられたのか。6日、幼鳥は元気に餌をもらっていた。このまま無事に独り立ちしてほしいものだ。

小坂里香（度会郡度会町）

朝明川源流を訪ねて

甲元　寛（松阪市）

「ブナ清水と呼ばれる源流部で夏鳥のさえずりを」この案内を見せて頂いただけで、この日が天気に恵まれ体調にも不具合が起きない事を願ってきました。念願通り絶好の天気で当日を迎えそれだけで「ラッキー」と叫ぶ思いでした。306号線の思わぬ工事渋滞で集合に遅刻し慌てましたが皆さん自己紹介の輪へなんとか間に合い、ほっとした事です。

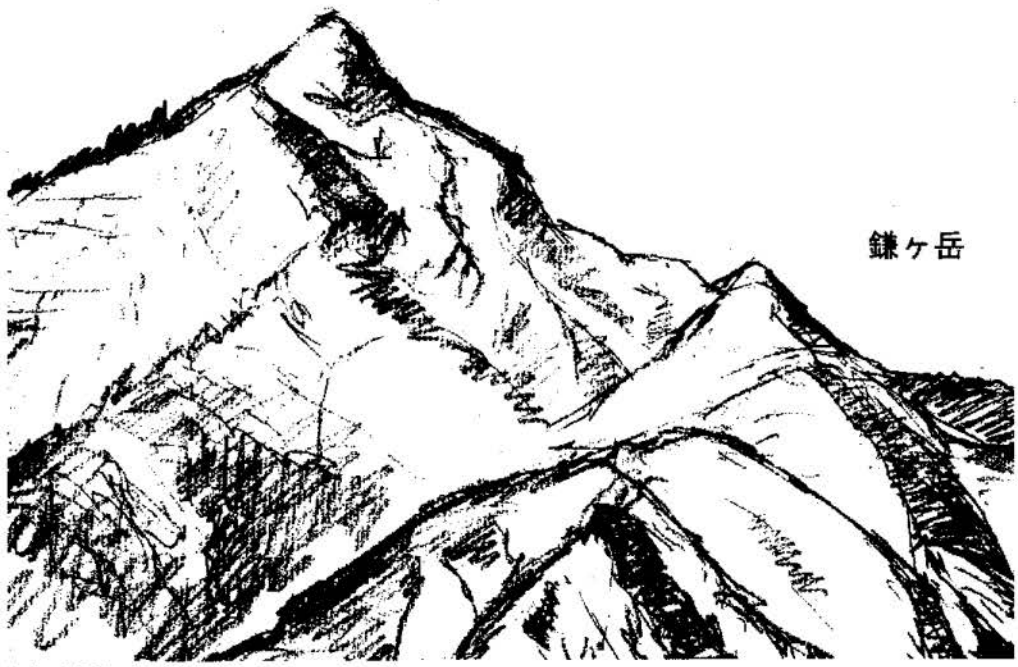
ハイキング程度の軽登山が好きで藤原岳へも春の花を楽しみに２～３度登りましたが、その度に足のツリが起こり　今回も初めての谷歩きで急登の程度が解らず少々心配もありました。出発前一部の皆さんが入念にストレッチをしておられ「これは少々きついのかな」との思いもこめて自分も筋を伸ばし筋肉を良く揉んでから出発した事です。

新緑の道を数百米歩いた辺りで突然皆さんの足が止り「シィー」と言った気配になり、続いて「オオルリ」との小声に前後して２０～３０米先で小鳥の気配　早速リーダーがスコープに入れて下さる。大きな虫をくわえた素晴らしいルリ色を見せて頂きました。虫はプレゼント？それとも子育てかなと想像させました。木の頂きで鳴いている処は何度か見た事がありますが今回新緑の若葉をバックに見た姿は思ったより小さく締まって見えました。出発して早々の間近でのオオルリとの出会いに幸先の良いスタートとなりました。

登山道、又川沿いの道を含めてゴロ石の道が続き私には少々神経を使うコースでした。浮石を踏まぬ様に前の人の足跡をとり乍ら歩巾に無理がない様にと　皆さん登り道には慣れておられる様で私には少々テンポが早かった様に思いますが、谷水の音に混じるミソサザイの声に立ち止まり、遠くで時には直ぐ頭の上の若葉の中からのオオルリの声に立ち止まり乍らの歩きは、足元の悪いのを忘れさせさわやかな汗を感じ乍らの歩きでした。

近年荒れ続きで石に苔が生えていないのか又は花崗岩のせいなのか谷が大変明るいのが印象に残りました。又中下流域で砂防ダムが連続して設けてあり、そのダムも土砂で殆んど満杯状態で護岸を含めて大変荒れる山で治山治水に苦労されていると思われました。当日の様な好天で川の流れも減水の中、何度かの浅い渡渉を楽しみ乍らの歩きの中にも、荒天の日の谷の姿を想像してしまいました。

足元に気を遣い乍らの歩きで時折落ちている白い花から頭上にシロヤシオが咲いているのに気付き、タニウツギは谷の向側でも点々と満開が見られ、サラサドウダンに混って珍しいベニドウ



鎌ヶ岳

ダンも可愛い赤い鈴を振って私達を迎えてくれました。下の方では時折見かけたイワカガミの若い照り葉淡い桃色の可憐な花は上るにつれて次第に大きい群落となり花色も濃いものの割合が多く見られました。特に源流近くでは土の殆んどない岩の上にも密生が見られ源流の大群落は見事の一語でした。又下の方では花を終えたシャクナゲが源流近くで丁度見頃で新緑の中で一際鮮やかな点景を見せてくれました。

リーダーの「源流到着でーす」の声に応える様に突然「キョッ　キョッ」と鳥の声で歓迎、警告を受けて念願の源流に到着しました。今迄の谷筋とは打って変わって高い新緑の透過光の下に広々とゆったりした、そしてやわらかい谷が広がっていて、その一角に一際大きい苔むした岩がありその真下から小さいペットボトルの太さ位で清水が流れ出ていて、周囲には積った腐葉土の湿り以外に水らしいものはなく正に源流でした。手をすゝぎ、水をすくう、飲む、旨い、素手ですくって水を飲むのはいつからか思い出せない。

開けた谷の少し奥にブナらしい枯木が一本あり丁度こちら側を向いて丸い穴が見えていたが突然に鳥の影が帰ってきて、アカゲラだそうで自分の目で見たのは初めてでした。どれ位の時を経てあの様に進化したのだろうか。アカゲラの出入りを見乍らやわらかい落葉混じりの土の感触に腰を下ろしておにぎりをほおばる。空になったペットボトルに湧き水を満たす。一人で今日一日を楽しんだお礼の妻への土産だ。私達はいつも参加させて頂くだけだが、リーダー達の御蔭で今日も色々な自然を深く味合わせて頂きました。

ウワミズザクラ

有難うございました。当分自然大好きは続きそうです。宜しくお願いいたします。あの清水の湧き出し口の淡いブルーのバリア？に包まれた「ヒダサンショウウオ」の卵は源流に預けられた命を信じて今夜も孵る日を待っているでしょう。

そして、夜も淡く光っているのでしょうか。

２００５．５．２４

庭に現れたノゴマ

横山真一（桑名市）

秋の小鳥達の渡りシーズンが近付いて忘れられない思い出が甦ってきた。昨年の１０月１８日の事だった。２歳の孫娘を庭で遊ばせていて１羽の小鳥がすぐ近くの柿の木の下でちょこちょこと動いているのに気付いた。直ぐに木陰に隠れてしまったが私の胸はドッキンと大きく打った。もしやノゴマ？

ノゴマの特徴である胸の赤い色が見えたように思った。その頃名古屋市の庄内緑地公園にノゴマが現れてカメラマンが大勢集まっていると噂が聞こえてきていた。まだ見たことが無かったので是非写真を撮りに行きたかったがお産を控えて体調を崩してしまった娘から孫娘を預かっていたので諦めていた。ノゴマだったら凄い事だなーと興奮しながら家内に告げると部屋の中から見に行った家内は、いるいる・・胸が真っ

赤だよと知らせに来た。行ってみると紛れもないノゴマである。やったー！　驚かせないようにそっと庭に戻り、三脚の上にカメラを載せて待機した。マイペースで遊んでいる孫娘を警戒して出てこないのではないかと気に成ったが待つほどもなくまた姿を見せた。写真を撮りながら少しずつ近付いた。ゆっくりゆっくりと・・・。向こうにもこちらの姿は目に入っているはずだがあまり恐れなくて５ｍくらいまで近付いたところで木陰に入ってしまった。神様も粋な計らいをするものだ。真面目に孫の養育をしているので行きたくても行けない自分を哀れんでノゴマを派遣してくださった・・そんな気がして思わぬ出会いがとても嬉しかった。

我家は桑名市の西の端で周辺を合わせると１万戸前後の一戸建てを中心とした住宅団地内の一軒である。ノゴマが寄れそうな庭はたくさんあるのにどうして我家の庭だったのだろうととても不思議である。芝生を中心にして周辺に柿の木や栗の木・ハッサクなどを植えてあるが、昨年は手入れも出来ないまま草ぼうぼうで放置してあったのが良かったのだろうか。ノゴマはこの地方ではなかなか観察できない珍しい鳥である。神様の粋な計らい説は楽しいが実際にはそんなことは無くて大きな偶然ということになるのだろうが、私は意外とたくさんのノゴマがこの辺りを通過しているのじゃないかと思うようになった。移動は夜間中心なので人目に付き難いだけ。注意して見ていればあちらにもこちらにも・・・とたくさん見付かるかもしれない。ノゴマの滞在はその日だけで翌日にはもう見られなかった。今年も一夜の宿を請われればノゴマと言わずたくさんの鳥たちに立ち寄ってもらいたいと願っている。

ツバメの巣　引越し作戦

西村　泉（度会郡 明和町）

春から初夏にかけて、事務局には野鳥について問い合わせが多くなる。野鳥たちの繁殖シーズンには、いろいろとトラブルがつきものだからだ。

６月はじめ、一般の方から一本のメールが届いた。問い合わせは、２～３日のうちに家を取り壊すがツバメの巣がある、可哀想だしどうすればよいかというものだった。返信にはヒナの巣立ちを待ってほしいこと、それが無理なら、やむを得ない措置として巣の移動方法を詳しく説明した。ところが、相談者からは巣立ちを待つことは無理で、巣の移動は不安なので来てもらいたいとのこと。本来なら行政が関わることだが休みだし、巣の引越しをさせるしか仕方が無いので要望に応えることにした。

櫛田川

場所は、嬉野町ののどかな田園地帯にある旧家。重厚な門構えのお宅で、軒先の梁の上に巣があるのだが、梁が柱のように太く位置も高く、また中庭の樹木で薄暗くて下か

ら見上げるだけでは判りづらい。梯子を上り覗いてみると、小さな巣があった。ヒナは孵化して４～５日ほどの大きさで、５羽がうずくまっていた。

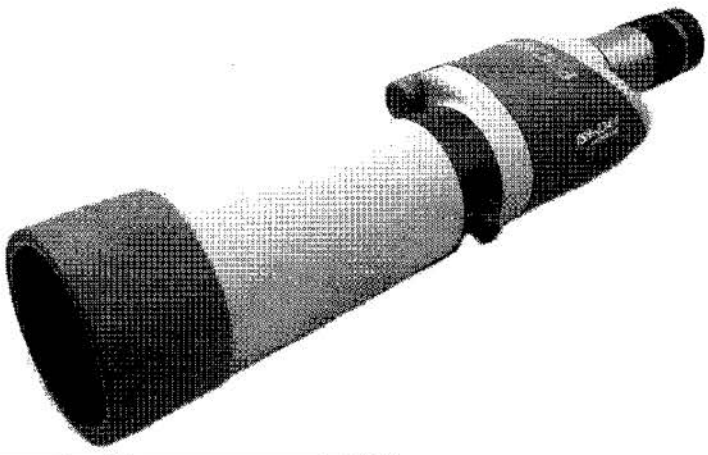
まずは、巣を移動させる場所の選定をする。あらかじめ副支部長で獣医である高橋先生に相談したところ１０ｍ以内であれば大丈夫だが、小さなヒナならあまり移動は難しいということだった。ヒナの大きさから考えて、引越し先は約３ｍ取り壊す家の前にある蔵の軒先に決めた。木切れにカップめんの容器（焼きそば用）を釘で固定し、それを雨の当たらない東の梁に打ち付けた。つぎに不安定な梯子の上でナイフを使って巣をこそげとり、とりあえず巣ごと別の器にいれて降ろした。最後に巣を取り付けた容器に入れた。

あとは親鳥しだいで、ヒナを見つけられなかったら仕方が無いと思っていたが、その日の夕方までエサを運んでいる様子がなかったら、また連絡してと伝えた。親鳥がこなかったら人工飼育をする覚悟でいた。それから、連絡が途絶えたので気になっていた。

後日、しばらく親鳥はうろうろしていたがエサ運びをしだし、すべてのヒナが無事巣立ったと嬉しい連絡をもらった。ツバメになり代わって、心やさしいご夫婦にお礼を申し上げたことはいうまでもないが、親鳥はたいしたものだと改めて感心させられた。

※巣（ヒナ・卵）の採取は鳥獣保護法にて禁止されている。

サネカズラ



取扱商品

フィールドスコープ
双眼鏡（小型・大型）
天体望遠鏡
カメラ（新品・中古）
その他光学製品各種

取扱メーカー

KOWA・NIKON・FUJINON
MIYAUCHI・VIXEN・PENTAX他

中部地区最大の光学製品専門店

TELESCOPE CENTER EYEBELL

テレスコープセンターアイベル（株式会社アイベル）
〒514-0801 津市船頭町3412（メガネのマスダ2F） TEL 059-228-4119
定休日／毎週水曜日　営業時間／10:00～19:00
ホームページ http://www.eyebell.com　メールアドレス eyebell@diamond.broba.cc

2005年度日本野鳥の会三重県支部総会

まとめ：事務局

2005年度日本野鳥の会三重県支部総会が、5月29日（日）13:30より、三重県総合文化センターで開催されました。出席者は35名、市川副支部長が司会進行をつとめ、杉浦支部長が挨拶した。そのあと、議長に近藤理事が選出され、議事録署名人に多田弘一氏、橋本富三氏を指名しました。以下の各項目について、それぞれ承認を受け、提案・意見が出されました。

2004年度事業報告承認の件＜保護部、研究部、企画部、編集部、事務局＞
2004年度決算報告、監査報告承認の件　＜事務局財務担当、監事＞
2005年度～2006年度役員候補承認の件　＜事務局＞
2005年度事業計画案承認の件　＜保護部、研究部、企画部、編集部＞
2005年度予算案承認の件　＜事務局財務担当＞

【意見①】ネットを活用した野鳥情報について、前向きに検討してほしい。
【意見②】野鳥情報という言葉を、野鳥記録にすればどうか。
【意見③】野鳥の情報は後生に残しておくことが必要だと思う。
【意見④】ホームページはありがたい。
【意見⑤】野鳥の記録の取り方を指導してほしい。

2004年度研究部事業報告

1．シギ・チドリ類個体数変動モニタリング調査（春期、秋期、冬期）
　環境省自然環境局野生生物課・(財) 世界自然保護基金ジャパン
2．三重県の委託事業「平成１６年度鳥獣保護区設定基礎調査」
（1）　調査地：○尾鷲市栗ノ木谷鳥獣保護区　○　大安町中部鳥獣保護区
　○南勢町南海鳥獣保護区　○ 尾鷲市佐波留鳥獣保護区のうち、佐波留島
（2）　調査内容：　調査地で、狩猟期間外と狩猟期間中に各１回、鳥類はラインセンサスや定点観察、哺乳類はフィールドサインや聞き取りで調査した。
　ただし、佐波留島の調査は１回のみで、2004年８月にその結果と考察を報告書にまとめて、提出した。他の報告書は、2005年３月に県へ提出した。
（3）　調査結果
○ 尾鷲市栗ノ木谷鳥獣保護区・・・夏季にオオルリ、ハチクマ、冬季には留鳥に加え冬鳥の小鳥類が数多く観察された。
○ 大安町中部鳥獣保護区・・・夏季・冬季ともヒヨドリ、スズメ、ハシボソガラスを中心とした、一般的な農耕地の鳥相を示していた。
○ 南勢町南海鳥獣保護区・・・メジロを中心に一般的な里山の小鳥を多数観察した。
○ 尾鷲市佐波留鳥獣保護区のうち、佐波留島・・・ゴイサギ、シラサギ類の繁殖を確認した。
3．三重県の委託事業「重要生態系候補地鈴島・大島動植物調査」
（1）　調査地：紀伊長島町鈴島・大島
（2）　調査内容：長島町沖の離島（大島、鈴島、耳穴島、赤野島）へ延べ８回、渡船で上陸また周辺を船で航行し、調査を行った。
（3）　調査結果：カンムリウミスズメ、ウチヤマセンニュウ、カラスバト、ハヤブサをはじめ１８科２５種類の鳥類が観察された。
4．三重県の委託事業「平成１６年度ガン・カモ類一斉調査」
（1）　調査地：三重県内174箇所及び新規飛来地

（2） 内容:会員３２名が、１月中旬にガン・カモ類のカウント調査し、研究部で各県民局別に集計し報告した。

5．三重県の委託事業「生物多様性調査「鳥類」調査」

（1） 目的　三重県産鳥類のレッドリストを作成するため

（2） 調査対象　三重県内の鳥類（準備書記載種）

（3） 内容:・　野外調査・　データ収集整理・分類群別カテゴリー定義（案）の検討
・　報告書の作成

2005年度研究部事業計画

1．シギ・チドリ類個体数変動モニタリング調査（春期、秋期、冬期）
朝明川河口、鈴鹿川～鈴鹿川派川河口、田中川河口～豊津浦海岸、
志登茂川～安濃川河口、愛宕川～金剛川河口、櫛田川河口、

2．三重県の委託事業
平成１７年度も受託する方向で進める。

2004年度保護部事業報告

1．木曽岬干拓地問題
愛知県支部、名古屋鳥類調査会と共にチュウヒ繁殖地保護の立場から運動した。
2004年11月28日に木曽岬フォーラムを開催した。
アセス準備書が提出され、それに関して問題点を指摘した意見書を提出した。特に定量的調査になっていないにも関わらず、50ha程度の保全区で3つがいが繁殖できるとした根拠がない点を中心に指摘した。

2．既存猛禽調査の継続
北勢地方クマタカ繁殖調査および中勢地方オオタカ繁殖調査、主として委託調査として行った

3．野鳥情報収集を研究部から引き継ぎ、収集体制を作り、「しろちどり」紙上で公表した。

4．五主海岸の砂州撤去について、県の方針、意見を聞いた。

2005年度保護部事業計画

1．木曽岬干拓地問題
チュウヒに繁殖する木曽岬の自然を多くの人たちに知ってもらうため、公開探鳥会を開く。
アセスの調査は問題があるので、再調査申し入れる。
5月22日現在、意見書に対しての見解書は出ていない。
見解書の内容次第で聴聞会の開催を要求する予定。
チュウヒ繁殖調査を継続する。
現在の活動：毎月第３土曜日に猛禽類行動調査（愛知県支部・名古屋鳥類調査会と共同で）および毎月第４日曜日に探鳥会（愛知県支部・名古屋鳥類調査会と共同で）

2．全県的な野鳥生息地調査活動を行う。
調査方法は定点調査あるいはライン調査で最低２ヶ月に１回で１年かけておこなう。
地区ごとに２，３箇所　新しい場所を中心に８月までに選定し、９月より開始する。

3．既存猛禽調査の継続
北勢地方クマタカ繁殖調査および中勢地方オオタカ繁殖調査を委託調査として継続する。

4．野鳥情報の収集、公表
ネットによる収集は簡便性と会員外からの情報という２点の特徴があるが、情報の質がわか

らないという問題点もある。また現在の一人だけの体制では対応しきれない。
現在の手法での収集を1年続ける。

5．その他、五主海岸砂州問題などに対応した保護活動を行う。

2004年度編集部事業報告

支部報［しろちどり］の発行　　4回

第43号　特集：三重県の海岸　30ページ　第44号　特集：三重県の川　　34ページ
第45号　特集：野鳥観察施設　24ページ　第46号　特集：橋本太郎氏　　32ページ

2005年度編集部事業計画

6月、9月、12月、3月発行予定（3月に発行する第50号をボリュームアップさせたい）

2004年度企画部事業報告

1．探鳥会、2004年4月から2005年3月までに合計59回の探鳥会を行った。（詳しくは「しろちどり」各号の探鳥会報告を参照してください。

2．野鳥講座

第1回　室内講座　8月22日（日）　三重県生涯学習センター　　21名参加
第2回　野外講座　9月5日（日）　　津市偕楽公園　　12名参加

3．その他（出展）

しぜん文化祭・2004　　11月6日（土）　嬉野町ふるさと会館

2004年度事務局報告

1．総会:　　5月23日（日）　三重県総合文化センター（男女共同参画センター）

2．理事会:　第1回　　5月23日（日）三重県総合文化センター（男女共同参画センター）
第2回　10月31日（日）三重県総合文化センター（生涯学習センター）
第3回　2005年　3月6日（日）　津市雲出市民センター

3．全国野鳥密猟問題シンポジウム

12月11日（土）～12日（日）　場所：伊勢青少年研修センター　参加：90名

2005年度～2006年度役員　　前号掲載のとおり

2004年度最終理事会議事録

日時：2005年5月29日（日）場所：三重県男女共同参画センター　出席：15名

1．提案・協議事項（事務局より）

① 2005年度総会打合せ：総会資料にもとづき議事内容、担当等について調整、決定した。
② 親睦会について：総会後の親睦会は自己紹介と羽根クイズを行う。
③ 個人情報のセキュリティーについて
・会員名簿は地区長に渡しているが、今後は地区会開催等で要請があったときにのみ渡すこととする。
・探鳥会参加者名簿は「保険」目的以外には使用しない。記入内容は氏名、住所（町名まで）、会員／非会員とする。ファックスでの送信は行わず、郵送とする。
・「しろちどり」への役員（部長以上）の連絡先掲載は可とする。

④ ホームページおよびメーリングリストについて

現状では管理者がホームページ更新をするに当たり、加入者からの反応が薄く意見を聞けないなど苦慮しているとのことである。

アクセス数にそれほどこだわる必要はないが、理事でＭＬに参加できる人は加入していただき、ホームページの活用・充実に努めていきたい。

⑤ 県内の小学校への「ヒナをひろわないで」「テグスポスター」の送付について

「ヒナをひろわないで」は鳥獣保護連盟から送付されている。

「テグスポスター」については県庁舎教育事務所に依頼しての配布を検討する。

3．報　　告（事務局から）

①委託業務（契約済み）：県営防災ダム事業環境調査委託

履行期間：平成17年4月26日～平成17年9月15日

②五主海岸の清掃：去る5月5日（木・祝）ジャイブと合同で会員有志を募って海岸清掃を行った。双方で40～50名が参加した。

③5月12日、斎宮調整池建設（国交省工事）に係る環境影響評価準備書に対す意見書を提出した。

2005年度日本野鳥の会三重県支部　年間行事計画

	地区別探鳥会					その他行事	
	北勢地区	伊賀地区	津地区	松阪地区	南勢地区	理事会・総会	企画・編集
4月	16(土)藤原岳山麓 19(火)海蔵川 23(土)県民の森 24(日)木曽岬			2(土)松阪ベルファーム	9(土)五十鈴公園		17(日)五主(干潟デー) 29(祝)野鳥講座
5月	4(火)鈴鹿川中流 21(土)朝明渓谷 22(日)木曽岬	8(日)南青山高原	28(土)青山高原		14(土)密猟パトロール　15(日)櫛田川,佐奈川	29(日)理事会、総会	
6月	26(日)木曽岬	19(日)屏風岩	12(日)朝明渓谷	4(土)奥杉	11(土)五十鈴公園	(25(土)-26(日)中部ブロック会議)	
7月	24(日)木曽岬						10(日)野鳥講座
8月	21(日)高松海岸 28(日)木曽岬		28(日)五主海岸				
9月	13(火)海蔵川 24(土)多度山 25(日)木曽岬			4(日)櫛田川河口			
10月	23(日)木曽岬	16(日)上野公園	16(日)白塚町鷹海岸	1(土)お熊ヶ池	1(土)伊勢の夕力渡り　(雨天の場合は2日) 8(土)五十鈴公園		30(日)野鳥講座
11月	15(火)海蔵川 19(土)県民の森 27(日)木曽岬	27(日)比自岐周辺				6(日)理事会	
12月	25(日)木曽岬		23(日祝)安濃ダム		4(日)穴川(交流会)	(3(土)-4(日)密猟シンポジウム)	
1月	22(日)木曽岬	22(日)青山町羽根		21(土)鈴の森公園	28(土)五十鈴公園		29(日)野鳥講座
2月	11(土祝)木曽三川 26(日)木曽岬		3(日)神戸の里山				
3月	7(火)石垣池 26(日)木曽岬	5(日)余野公園		24(金)丹生	3(金)宮川中流 11(土)五十鈴公園	12(日)理事会	

2005年度一般会計予算書

● 2005年4月1日～2006年3月31日　　日本野鳥の会 三重県支部
● 上段＝予算、中段＝注釈、下段＝2004年度実績

【】収入の部　○一般会計

支部会費	728,000 364名＊2,000円 727,150
受取寄付金	15,000 26,000
受取補助金	0 60,000
受取利息	40 37
雑収入	20,000 広告料 20,000円 23,000
①収入合計	763,040

○特別会計

販売事業	330,000*15%	49,500
動植物調査	230,000*15%	34,500
ガンカモ	304,500*15%	45,675
鳥獣保護	566,450*15%	84,967
絶滅種保存	750,000*15%	112,500
RED データ	593,250*15%	88,988
オオタカ	735,000*15%	110,250
②収益合計		526,380

③総収入合計
1,289,420

【】支出の部　● 上段＝2005年度予算、下段＝2004年度実績

	総会費	理事会費	事務局費	支部活動費	支部報費	対外費	研修費	部長会議費	合計
通信費	49,000	7,000	150,000	20,000	170,000	0	0	0	396,000
	43,310	6,100	142,847	13,800	162,769	0	0	0	368,826
印刷費	4,000	2,000	3,000	35,000	240,000	0	0	0	284,000
	3,710	1,600	1,896	27,094	183,960	0	0	0	218,260
消耗品費	0	0	30,000	55,000	55,000	0	0	0	140,000
	379	0	94,760	12,150	51,920	0	0	0	159,209
会場費	12,000	3,000	4,000	15,000	5,000	0	0	2,500	41,500
	11,600	3,240	3,150	5,500	5,000	0	0	2,500	30,990
会議費	0	0	0	35,000	0	0	0	0	35,000
	0	0	3,150	15,549	0	0	0	0	18,699
旅費交通費	800	38,000	0	20,000	10,000	140,000	0	8,000	216,800
	800	34,000	2,500	44,400	8,360	61,310	0	8,000	159,370
諸会費	0	0	0	10,000	0	35,000	50,000	0	95,000
	0	0	0	10,000	0	17,000	0	0	27,000
雑費	200	0	2,000	1,500	2,500	210	630	0	7,040
	200	0	1,660	1,435	2,275	210	0	0	5,780
交際費	0	0	6,000	0	0	10,000	0	0	16,000
	0	0	6,000	0	0	5,840	0	0	11,840
講師謝礼費	0	0	0	15,000	0	0	0	0	15,000
	0	0	0	15,000	0	0	0	0	15,000
図書費	0	0	5,000	0	0	0	0	0	5,000
	0	0	7,000	0	0	0	0	0	7,000
一般予算合計	66,000	50,000	200,000	206,500	482,500	185,210	50,630	10,500	④ 1,251,340

差引収益額	③ － ④	38,080

●支部活動費・・・・・企画部・保護部・研究部・保護活動・地区活動

●対　外　費・・・・・中部ブロック・密対連・干潟を守る日・野生ネット

野　鳥　記　録

保護部　　（受付順）

種　名	個体数	観察日	場　所　（通　称）		備考・メモ	報告者
チュウシャクシギ	2	7月19日	楠町	鈴鹿川派川河口	渡り初認	安藤　宣朗
キアシシギ	3	7月19日	川越町	高松海岸	渡り初認	安藤　宣朗
タカブシギ	1	7月19日	桑名市	城南干拓	渡り初認	安藤　宣朗
タマシギ	2	7月22日	三重県中部		渡り初認	安藤　宣朗
ツバメチドリ	3	7月22日	三重県中部		渡り初認	安藤　宣朗
ウズラシギ	1	7月22日	三重県中部		渡り初認	安藤　宣朗
ｾｸﾞﾛｱｼｻｼ	1	7月26日	南牟婁郡御浜町	台風の後保護、体調回復後放鳥予定		中井　節二
ハジロカイツブリ	2	7月28日	四日市市磯津町	鈴鹿川河口	シーズン初認	安藤　宣朗
カンムリカイツブリ	2	7月28日	四日市市磯津町	鈴鹿川河口	河口で採餌中	安藤　宣朗
ミヤコドリ	1	7月28日	四日市市磯津町	鈴鹿川河口	シーズン初認	安藤　宣朗
ヒタキ類幼鳥	1	7月29日	亀山市	野登山	巣立ちしたばかり	安藤　宣朗
キョウジョシギ	2	8月1日	四日市市楠町	鈴鹿川　派川	シーズン初認	安藤　宣朗
ヤツガシラ	1	7月30日	紀宝町高岡	相野谷川堤	飛翔中確認	清水　勝海
オオチドリ	2	4月14日	御浜町市木		水田で採餌中	清水　勝海
アオアシシギ	3	8月8日	桑名市	城南干拓	渡り初認	安藤　宣朗

『ヒタキ類の幼鳥らしい』との観察記録が寄せられた。幸いなことに「写真がある」と聞き、観察者お二人から写真を送って頂いた。みると、各羽縁の白斑とあどけない面差しで、当歳の幼鳥であることには間違いない。保護部内で検討するとともに、本部普及室にも観察データと写真を送り見てもらった。普及室では、「2種ぐらいに絞り込めるが特定は難しい。どの種が繁殖しているかを見るのも大切」とのことであった。コサメビタキとキビタキの幼羽の写真が手に入ったが、やはりそれとも違うようである。そこで今回は、「ヒタキ類幼鳥」として記録した。

余談になるが以前、霧が峰の湿原で地味な茶色の鳥がいるのを見ていたら、ノビタキ（ツグミ科）が餌を運んできたので初めてその雛だということが分かった。種によって、幼鳥羽衣は親鳥とは似ても似つかぬことがある。

（保護部　川口久美）

探鳥会報告　　2005年5月～7月

● イカルチドリの観察

（共催　視全感察快（会））

2005年5月4日（水）　9:30-12:10

鈴鹿川中流域（亀山市御幸町、東御幸町の鈴鹿川左岸）

楢原蓁　伊藤多紀子　　参加者10人

カワウ（2）、ダイサギ（2）、アオサギ（2）、カルガモ（2）、オオタカ（1）、＊コジュケイ（1）、キジ（2）、コチドリ（1）、イカルチドリ（2）、ケリ（2）、イソシギ（1）、キジバト（3）、カワセミ（1）、ヒバリ（2）、ツバメ（5）、ハクセキレイ（1）、セグロセキレイ（2）、ヒヨドリ（2）、モズ（2）、＊ウグイス（2）、ホオジロ（3）、カワラヒワ（3）、スズメ（8）、ムクドリ（4）、ハシボソガラス（3）、ハシブトガラス（1）。　＊：声のみ　計26種

昨年までは、キアシシギ、アオアシシギ、ジシギ類が見られ、少し川上ではオオヨシキリのさえずりもあったが今年はなかった。

探鳥会報告

● 高原の野鳥観察

2005年5月8日(日) 9:30-12:00

青山高原保健休養地(白山町)

田中豊成　小林達也　　参加者17人(会員15人、会員外2人)

ノスリ、キジバト、ツツドリ、オオアカゲラ、コゲラ、ツバメ、キセキレイ、モズ、ウグイス、ヤマガラ、シジュウカラ、メジロ、ホオジロ、カワラヒワ、イカル、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス。　計18種

夏鳥では、ツツドリ、ツバメが観察された。ウグイス、メジロ、ホオジロ等のオスは盛んにさえずりを行なっており、ノスリはディスプレー飛行を行なっていて鳥全体が繁殖期真最中であった。

● 密猟地帯を行く早朝探鳥会

2005年5月14日(土) 6:00-

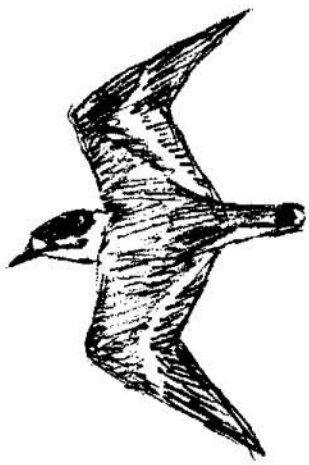
伊勢市と南島町の山林

林淳子　中村みつ子　　参加者9人(会員9人)

カワウ、キジ、キジバト、アカショウビン、ヒヨドリ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、オオルリ、サンコウチョウ、ヤマガラ、シジュウカラ、メジロ、ホオジロ、イカル、カケス、ハシブトガラス。

計17種

昨年、支部主催で開催された全国密猟問題シンポジウムの報告も支部報に掲載され、会員の皆様にも少しは関心を持っていただけたと思っていたのに参加者はいつもの密猟パトロールのメンバー8名と会員からは宮川村から参加された高校生の方1名のみでした。早朝のことでもあり、多数の参加は望めないとは思っていましたが、三重県内各地での密猟対策の一助になればと会員限定公開としましたが関心の無さにがっかりしました。



シロチドリ

● 櫛田川・佐奈川探鳥会

2005年5月15日(日) 9:30-12:00

多気町朝長

西村泉　中村洋子　　参加者22人(会員18人、非会員4人)

カワウ、コサギ、アオサギ、トビ、コジュケイ、クイナ、バン、キジバト、コゲラ、ヒバリ、ツバメ、イワツバメ、ウグイス、オオヨシキリ、セッカ、ホオジロ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス。　計21種

ここで初めての探鳥会だったが、河川整備されたためか思ったより鳥が少なかったので、オプションで対岸にある神山神社へ行った。帰りがけ、梅林でコゲラの巣にアオダイショウが入り、親鳥が騒いでいるのを目撃した。

● 朝明源流探鳥会

(共催　鈴鹿ハイキング倶楽部)

2005年5月21日(土) 9:00-15:00

菰野町大字千草朝明渓谷

辻秀之　川口久美　　参加者14人(会員9人、非会員5人)

ジュウイチ、ツツドリ、ホトトギス、アオゲラ、アカゲラ、コゲラ、キセキレイ、ヒヨドリ、ミソサザイ、コルリ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、オオルリ、エナガ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、メジロ、ホオジロ、イカル、カケス、カラス(sp)。　計23種

当日は好天に恵まれ、絶好の登山日和だった。夏鳥などのさえずりも盛んであった。朝明源流付近は登山者もめったに入らない場所で、静かに探鳥が楽しめた。

● 木曽岬干拓地探鳥会

(共催　愛知県野鳥保護連絡協議会)

2005年5月22日(日)

三重県木曽岬干拓地／愛知県鍋田干拓地

近藤義孝　　参加者7人

カワウ(20)、ダイサギ(4)、コサギ(2)、アオサギ(4)、カルガモ(12)、ミサゴ(3)、チュウヒ(2)、キジ(9)、コチドリ(3)、ケリ(30)、クサシギ(1)、キアシシギ(5)、イソシギ(3)、チュウシャクシギ(2)、コアジサシ(5)、キジバト(10)、ヒバリ(20)、ツバメ(15)、ハクセキレイ(1)、ヒヨドリ(3)、モズ(1)、オオヨシキリ(10)、セッカ(50)、ホオジロ(1)、カワラヒワ(3)、スズメ(100)、ムクドリ(20)、ハシボソガラス(100)、ハシブトガラス(20)、ドバト(25)。　計30種

探鳥会報告

雨の中、参加者は7人と少なかったのですが、木曽岬干拓地のなかでチュウヒの餌渡しを見ることが出来ました。

● 青山高原探鳥会
2005年5月28日（土）9:10-11:30
白山町伊勢見・青山高原保健休養地周辺
平井正志　橋本富三　　参加者12人（会員12人）
キジバト、カッコウ、ツツドリ、ホトトギス、アオゲラ、キセキレイ、ヒヨドリ、クロツグミ、ウグイス、エナガ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ホオジロ、イカル、カケス、カラス（sp）。　　計17種

十分な下見もできなかったが、天気もよく、ホトトギス、カッコウの声を聞きながら初夏のさわやかな高原を楽しむことができた。鳥はやや少なく、ものたりないが、植物の話に夢中になり、時間を過ごした。青山高原に設置されている風力発電に対する野鳥の会の姿勢についての質問もあった。ホームページを見て大阪から参加した方があった。

● 美杉探鳥会
（共催　三重大学）
2005年6月4日（木）16:30-20:30
一志郡美杉村川上
坂元伸治　中村洋子　　参加者42人（会員14人、会員外28人）
ツツドリ（2）、ホトトギス（2）、フクロウ（1）、ヨタカ（1）、アカショウビン（1）、アオゲラ（1）、ツバメ、キセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ヤブサメ、オオルリ（5）、ヒガラ、シジュウカラ、カケス、ハシブトガラス。
計16種

雨の予想だったが、曇りのままでよかった。フクロウの鳴き声が聞かれた2週間前からコノハズクが聞かれなくなった。オオルリのさえずりは多く、ヨタカの飛ぶ姿が見られ、アカショウビンの大きな声、ツツドリ、ホトトギスの鳴き声がたくさん聞け、よかったの感想多し。来年は5月中旬に変更が良いと思う。

● 五十鈴公園バードウオッチング
2005年6月11日（土）
伊勢市宇治浦田町　五十鈴公園周辺
小坂里香　西村泉
雨天中止したが、集合した参加者とおはらい町でツバメの繁殖、イソヒヨドリの親子などを観察した。

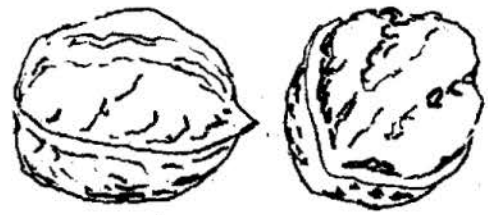
● 朝明渓谷（ハト峰）探鳥会
2005年6月12日（日）　10:00-15:30
三重郡菰野町　朝明渓谷
川口久美　岡八智子　　参加者23人（会員16人、会員外7人）
トビ、＊カッコウ、＊ツツドリ、ホトトギス、アオゲラ、コゲラ、キセキレイ、ヒヨドリ、カワガラス、ミソサザイ、＊クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、オオルリ、ヒガラ、＊ヤマガラ、シジュウカラ、メジロ、ホオジロ、イカル、カケス、ハシブトガラス。　＊：声のみ　計22種

非会員の参加者が、7名あり嬉しく思った。なかでも4名は支部のホームページの探鳥会案内を見ての参加であった。支部の広告塔として立ち上げたホームページの効果が現れつつある。

● 屏風岩探鳥会
2005年6月19日（日）　9:00-13:00
奈良県曽爾村
田中豊成　小林達也　　参加者20人（会員17人、会員外3人）
ハチクマ、キジバト、カッコウ、ツツドリ、ホトトギス、アオゲラ、オオアカゲラ、イワツバメ、ヒヨドリ、ウグイス、キビタキ、オオルリ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、カケス、ハシブトガラス。　　計17種

初夏で木の葉が茂り、野鳥達の姿は見えにくくなりがちであった。眼前に迫る屏風岩は丁度舞台の反響板のようになっていて鳥達の囀りを一層大きくしてくれていた。特にトケン3種やキビタキ、オオルリ、アオゲラ等の声がよく聞こえ、バードリスニングの探鳥会であった。

サワグルミ



● 木曽岬干拓地探鳥会
(共催 愛知県野鳥保護連絡協議会)
2005年6月26日(日)
三重県木曽岬干拓地/愛知県鍋田干拓地
近藤義孝 村田芳雄 参加者23人
カワウ(100)、ゴイサギ(1)、ササゴイ(1)、アマサギ(1)、ダイサギ(2)、チュウサギ(1)、コサギ(2)、アオサギ(13)、カルガモ(27)、ミサゴ(5)、キジ(7)、コチドリ(7)、ケリ(20)、イソシギ(2)、コアジサシ(1)、キジバト(4)、カワセミ(3)、ヒバリ(15)、ツバメ(30)、ハクセキレイ(1)、オオヨシキリ(10)、セッカ(20)、ホオジロ(1)、カワラヒワ(5)、スズメ(50)、ムクドリ(230)、ハシボソガラス(100)、ハシブトガラス(10)、ドバト(5)。 計29種

参加者は23名と多かったが、木曽岬鍋田の探鳥会としては観察できた鳥類は少なかった。

● 木曽岬干拓地探鳥会
(共催 愛知県野鳥保護連絡協議会)
2005年7月24日(日)
三重県木曽岬干拓地/愛知県鍋田干拓地
近藤義孝 村田芳雄 参加者23人
カイツブリ(2)、カワウ(150)、ゴイサギ(6)、ダイサギ(7)、チュウサギ(1)、コサギ(8)、アオサギ(10)、カルガモ(21)、ミサゴ(3)、トビ(1)、チュウヒ(2)、キジ(10)、コチドリ(2)、ケリ(6)、クサシギ(2)、イソシギ(4)、キジバト(10)、ヒバリ(5)、ツバメ(50)、ハクセキレイ(2)、ヒヨドリ(2)、セッカ(30)、ホオジロ(2)、カワラヒワ(40)、スズメ(100)、ムクドリ(20)、ハシボソガラス(50)、ハシブトガラス(16)、ドバト(10)。 計29種

先月と同じ29種類と、夏は観察できる鳥類が少ない。

7月下旬、野鳥の会から会員宛にIBA(日本の重要野鳥生息地)のポスターが送られてきた。これによればレッドデータブックに挙げられるような重要な野鳥の生息地として全国で約170箇所、三重県では4箇所が選定されている。大台の森林地帯や伊勢湾の海岸等が野鳥の生息や渡りの休息地として適しているためであろう。これら三重県内のIBAを大切に次の世代へ手渡して行きたいものである。

ちなみにこのポスター、野鳥の精密な描写が素晴らしい。私は部屋の壁に張ってインドアバードウォッチングを楽しませてもらっている。(O)

お詫び

しろちどり47号、11ページのカットは「ムシカリ」ではなく、「ヤブデマリ」でした。(編集部)

お知らせ

編集部ではしろちどり用カットを募集しています。野鳥、野生の動植物、風景など編集部までお寄せください。鉛筆画でも結構ですが、べたのつぶしはあまりよく印刷できません。なるべく原画をお送りください。

また50号記念号に掲載する写真も募集しています。採用されたものの中から幾つかはカラーで掲載する予定です。ふるって応募ください。詳しくは47号を参照下さい。

しろちどり 48号
2005年9月7日発行
題字: 濱田 稔
表紙絵: 嶋田春幸
カット: 鹿島素子・平井正志・坂口 守

編集: 平井正志 〒514-2325
安芸郡安濃町田端上野910-49
発行所: 日本野鳥の会三重県支部
杉浦邦彦方
〒516-0026 伊勢市宇治浦田2丁目9-4
http://www.amigo2.ne.jp/~miebirds/
印刷: 伊藤印刷株式会社